「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」
地域社会学科

令和４年度研究開発実施報告書
（第１年次）

北海道大樹高等学校

目　次

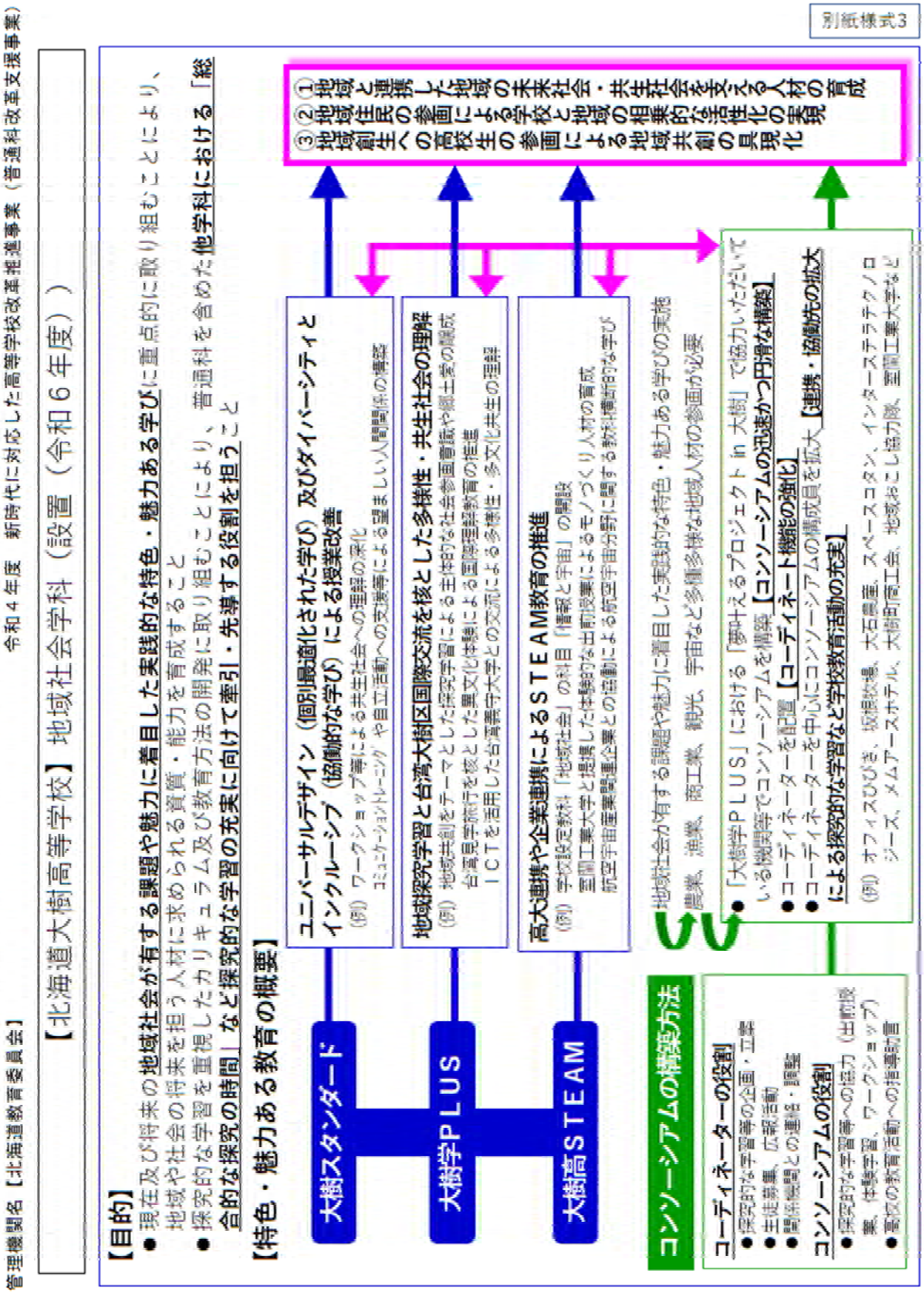
Ⅰ　概要
　1　研究開発イメージ図
　2　ロジックモデル
　3　研究開発の概要
　4　実施体制の概要
　5　研究実績報告

Ⅱ　研究内容
　1　大樹スタンダードにおける取組
　　（1）CST（コミュニケーション・スキル・トレーニング）
　　（2）高等学校における通級による指導
　　（3）SDGs ワークショップ
　2　大樹学 PLUS における取組
　　（1）インターンシップ
　　（2）見学旅行教科等横断型学習
　　（3）台湾義守大学との文化交流
　　（4）地域探究活動
　3　大樹高 STEAM における取組
　　（1）室蘭工業大学連携授業
　　（2）大樹エアロスペーススクール 2022
　　（3）ＪＡＸＡ講座・ＩＳＴ工場見学
　　（4）学校設定教科の開発
　4　先行事例調査研究
　　（1）愛媛県立三崎高等学校
　　（2）北海道大空高等学校

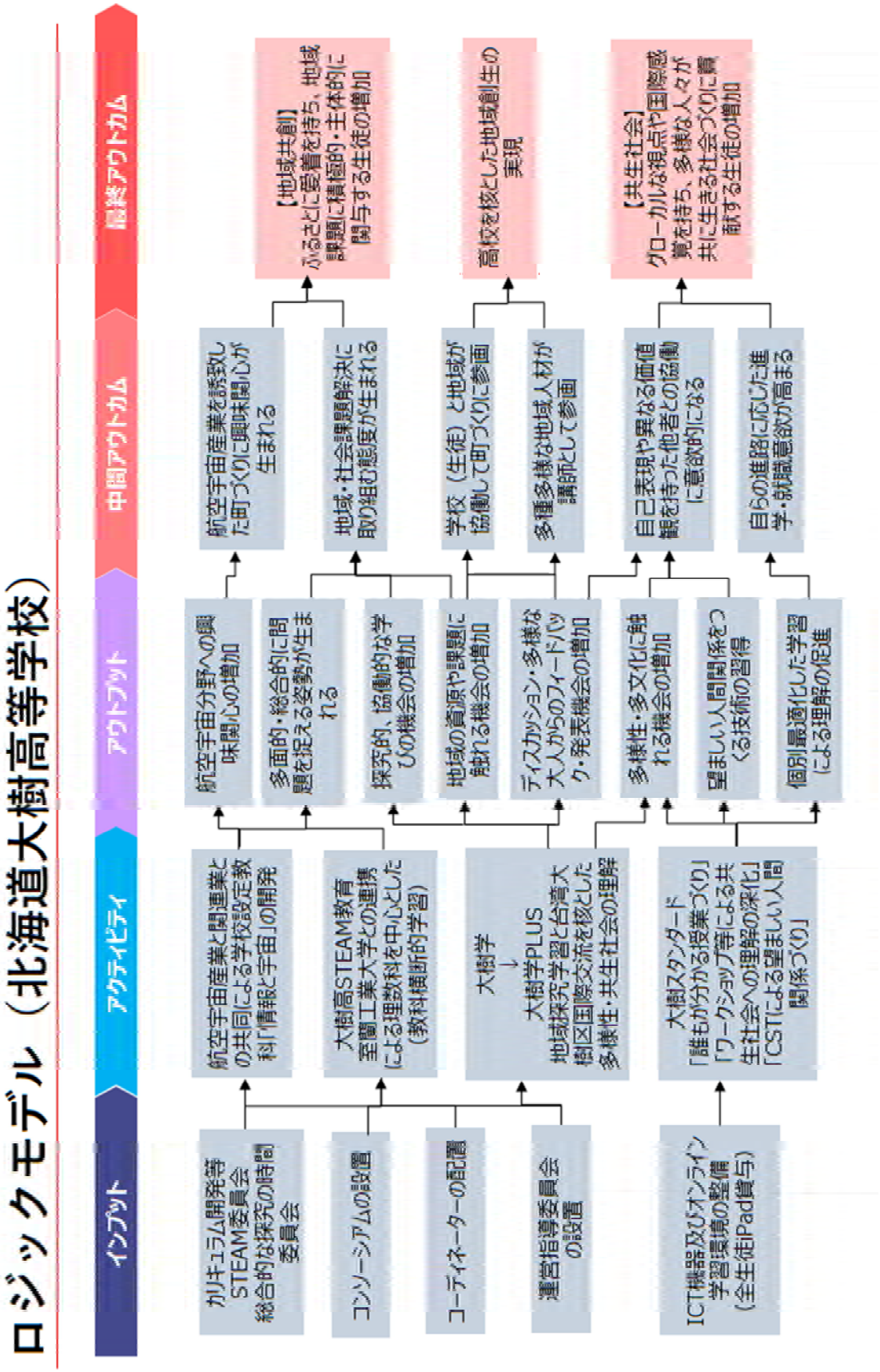
Ⅲ　成果概要図
　1　成果概要図

Ⅰ　概要

1　研究開発イメージ図


別紙様式3
管理機関名【北海道教育委員会】
令和４年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）
【北海道大樹高等学校】地域社会学科（設置（令和６年度））
【目的】
●現在及び将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取り組むことにより、地域や社会の将来を担う人材に求められる資質・能力を育成すること
●探究的な学習を重視したカリキュラム及び教育方法の開発に取り組むことにより、普通科を含めた他学科における「総合的な探究の時間」など探究的な学習の充実に向けて牽引・先導する役割を担うこと
【特色・魅力ある教育の概要】
大樹スタンダード
ユニバーサルデザイン（個別最適化された学び）及びダイバーシティとインクルーシブ（協働的な学び）による授業改善
(例) ワークショップ等による共生社会への理解の深化
コミュニケーショントレーニング や自立活動への支援等による望ましい人間関係の構築
大樹学ＰＬＵＳ
地域探究学習と台湾大樹区国際交流を核とした多様性・共生社会の理解
(例) 地域共創をテーマとした探究学習による主体的な社会参画意識や郷土愛の醸成
台湾見学旅行を核とした異文化体験による国際理解教育の推進
ＩＣＴを活用した台湾高雄中大学との交流による多様性・多文化共生の理解
大樹高ＳＴＥＡＭ
高大連携や企業連携によるＳＴＥＡＭ教育の推進
(例) 学校設定教科「地域社会」の科目「情報と宇宙」の開設
宇宙工業大学と提携した体験的な出前授業によるモノづくり人材の育成
航空宇宙産業関連企業との活動による航空宇宙分野に関する教科横断的な学び
①②①地域と連携した地域の未来社会・共生社会を支える人材の育成
②②地域住民の参画による学校と地域の相乗的な活性化の実現
③③地域創生への高校生の参画による地域共創の具現化
地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びの実施
農業、漁業、商工業、観光、宇宙など多種多様な地域人材の参画が必要
●「大樹学ＰＬＵＳ」における「夢叶えるプロジェクト in 大樹」で協力いただいている機関等でコンソーシアムを構築【コーディネート機能の強化】
●コーディネーターを配置【コーディネーターによる探究的な学習など学校教育活動の充実】
●コーディネーターを中心にコンソーシアムの構成員を拡大【連携・協働先の拡大】
(例) オフィスひびき、坂根牧場、大石農園、スペースコタン、インターステラテクノロジーズ、メムアースホテル、大樹町商工会、地域おこし協力隊、宇宙工業大学など
コンソーシアムの構築方法
コーディネーターの役割
●探究的な学習等の企画・立案
●地域等との連絡・調整
●共生等事業、広報活動
コンソーシアムの役割
●探究的な学習等への協力（出前授業、体験学習、ワークショップ）
●高校の教育活動への提案等協力

2　ロジックモデル


ロジックモデル（北海道大樹高等学校）
インプット
アクティビティ
アウトプット
中間アウトカム
最終アウトカム
カリキュラム開発等
STEAM委員会
総合的な探究の時間
委員会
コンソーシアムの設置
コーディネーターの配置
運営指導委員会
の設置
ICT機器及びオンライン
学習環境の整備
（全生徒iPad貸与）
航空宇宙産業と関連業と
の共同による学校設定教
科「情報と宇宙」の開発
大樹高STEAM教育
室蘭工業大学との連携
による理数科を中心とした
（教科横断的学習）
大樹学
↓
大樹学PLUS
地域探究学習と台湾大
樹区国際交流を核とした
多様性・共生社会の理解
大樹スタンダード
「誰もが分かる授業づくり」
「ワークショップ等による共
生社会への理解の深化」
「CSTによる望ましい人間
関係づくり」
航空宇宙分野への興
味関心の増加
多面的・総合的に問
題を捉える姿勢が生ま
れる
探究的、協働的な学
びの機会の増加
地域の資源や課題に
触れる機会の増加
ディスカッション・多様な
大人からのフィードバッ
ク・発表機会の増加
多様性・多文化に触
れる機会の増加
望ましい人間関係をつ
くる技術の習得
個別最適化した学習
による理解の促進
航空宇宙産業を誘致し
た町づくりに興味関心が
生まれる
地域・社会課題解決に
取り組む態度が生まれる
学校（生徒）と地域が
協働して町づくりに参画
多種多様な地域人材が
講師として参画
自己表現や異なる価値
観を持った他者との協働
に意欲的になる
自らの進路に応じた進
学・就職意欲が高まる
【地域共創】
ふるさとに愛着を持ち、地域
課題に積極的・主体的に
関与する生徒の増加
高校を核とした地域創生の
実現
【共生社会】
グローカルな視点や国際感
覚を持ち、多様な人々が
共に生きる社会づくりに貢
献する生徒の増加

3　研究開発の概要

新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）　研究開発の概要

<table>
<tr><td>ふりがな</td><td colspan="4">ほっかいどうたいきこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">北海道</td></tr>
<tr><td rowspan="3">①学校名</td><td colspan="4" rowspan="3">北海道大樹高等学校</td></tr>
<tr><td>③設置形態</td><td>公立</td></tr>
<tr><td>④課程別</td><td>全日制</td></tr>
<tr><td>⑤生徒数</td><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>計</td><td colspan="2">⑦教職員数</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>27</td><td>23</td><td>33</td><td>83</td><td colspan="2" rowspan="4">教員数：14
職員数：２</td></tr>
<tr><td>⑥学級数</td><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>計</td></tr>
<tr><td>普通科</td><td>1</td><td>1</td><td>1</td><td>3</td></tr>
<tr><td>⑧設置（予定）
学科名</td><td colspan="4">（地域社会学科）</td><td>⑨設置（予定）
年度</td><td>令和６年度</td></tr>
<tr><td>⑨研究開発
の概要</td><td colspan="6">地域創生の核となる高校の魅力化に向けて地域共創･共生社会の担い手の育成を図るカリキュラム開発研究及び関係機関等との連携・協働体制の構築研究
①大樹スタンダード（ユニバーサルデザイン（個別最適化された学び）及びダイバシティとインクルーシブ（協働的な学び）による授業改善の取組）
②大樹学ＰＬＵＳ（地域探究学習と台湾大樹区国際交流を核とした多様性･共生社会の理解）
③大樹高ＳＴＥＡＭ（高大連携や企業連携によるＳＴＥＡＭ教育の推進）</td></tr>
<tr><td>⑩研究開発
の内容等</td><td colspan="6">「大樹スタンダード」と「サポートコンソーシアム」を核とした地域共創・共生社会の担い手づくりをテーマに、学校の特色化・魅力化に取り組む。
１　主な取組
○「大樹スタンダード」
ユニバーサルデザイン（個別最適化された学び）及びダイバーシティとインクルーシブ（協働的な学び）による授業改善
○「大樹学ＰＬＵＳ」
地域探究学習と台湾高雄市大樹区との国際交流を核とした多様性・共生社会の理解
○「大樹高ＳＴＥＡＭ」
高大連携モノづくり出前授業と航空宇宙産業との連携による理系教科を中心とした教科等横断的学び
２　具体的な内容
○「大樹スタンダード」
・学習者を主体とする「誰もが分かる授業づくり」による、主体的な学びの構築
・定期考査の廃止と観点別学習状況の評価の深化による、主体性を引き出す指導と評価の一体化
・外部講師を招いたワークショップ等による、共生社会への理解の深化
・コミュニケーションスキルトレーニング（ＣＳＴ）や自立活動への支援等による、望ましい人間関係を作る技術の習得
○「大樹学ＰＬＵＳ」
・地域共創をテーマとした探究学習による、主体的な社会参加意識の育成と郷土愛の</td></tr>
</table>

	醸成 ・地域へ向けた学習成果報告会・高校生議会等による、表現力の育成 ・台湾見学旅行を核とした異文化体験による、国際理解教育の推進 ・ＩＣＴを活用した台湾義守大学とのリモート交流による、多様性・多文化共生の理解 ○「大樹高ＳＴＥＡＭ」 ・室蘭工業大学と提携した体験的な出前授業による、モノづくりを支える人材の育成 ・出前授業を核とした数学科・理科・音楽科・情報科・商業科との連携授業による教科等横断的な学習の推進 ・地域の航空宇宙産業関連企業との協働による航空宇宙分野に関連する教科等横断的な学習の推進 ・ＪＡＸＡエアロスペーススクールへの参加等による、航空宇宙分野への興味関心の喚起 ３　期待される効果 ○地域の教育力を最大限に引き出し、多様な人々が共に生きる社会を支える、豊かな心を持った生徒を育てる学校づくり（共生）と、地域と共に学び合い、新たな価値を創っていく生徒を育てる学校づくり（共創）の実現 ○地域と連携して行う未来社会を支える人材の育成が、学校の魅力化と地域の活性化につながることで、地域における学校の存在意義が明確になり、地域に開かれた教育課程が実現
その他 学校の特徴	大樹高校は昭和 23 年開校以来、南十勝の中心校として発展してきたが、少子化の影響により生徒数が減少し、小規模校化している。こうした状況ではあるが、町内には大樹高校しかなく、地域創生の核として地域からの期待が大きい。 大樹町が地域活性化・人口減を打開する方策の１つとして取り組んでいる「航空宇宙産業の誘致による町づくり」に、大樹高校は積極的に参画し、地域の教育力を引き出しながら探究学習を進めており、高校生の力が町づくりに活かされるよう、地域共創の具現化を目指し、学校の特色化・魅力化を推進している。

研究開発の具体的な取り組み

（１）取組の目的

人口減少という社会的な課題に対し、航空宇宙産業の誘致を核とした地域活性化策を推進する大樹町の取組について、教育の分野から理解を深め、多様な人材と協働しながら、将来の大樹町を支える人材を育てることが、地域の最高学府である大樹高校の役割として求められている。このことを達成するために、生徒の資質・能力を高める課題解決型の探究学習と、最先端の科学技術と地域の身近な生活問題を結び付けた教科等横断的な学びに重点を置いた、教育課程を編成することが有効である。未来社会を支える人材を育成するため、地域と連携して教育課程を実施することで、学校の魅力化と地域の活性化が結び付き、地域における学校の存在意義が明らかになるとともに、地域に開かれた教育課程を実現する。

（２）主な取組

ア　地域共創・共生社会をテーマとした探究学習

イ　高大連携による教科等横断的な学び

（３）取組内容

各教科・科目の学習を基盤に、総合的な探究の時間を中心とした「探究学習」を縦軸、高大連携授業や学校設定教科・科目を中心とした「教科等横断的な学び」を横軸として、全体的に相乗効果が発揮されるよう、教育課程の運用を工夫する。

（探究学習）～各学年での探究プロセスを積み重ね、資質・能力を段階的に高める

ア　１学年のインターンシップを中心とした進路探究学習

イ　２学年の台湾見学旅行を中心とした比較文化探究学習

ウ　３学年の総合的な探究の時間における地域探究学習

エ　高校生議会の実施による、地域へ向けた探究学習の成果報告及び町作りの提案

（教科等横断的な学び）～科学技術と社会問題を結び付け、課題対応力を高める

オ　室蘭工業大学と提携したモノづくり出前授業

カ　出前授業を核とした、数学科・理科・音楽科・情報科・商業科連携による教科等横断的な学習

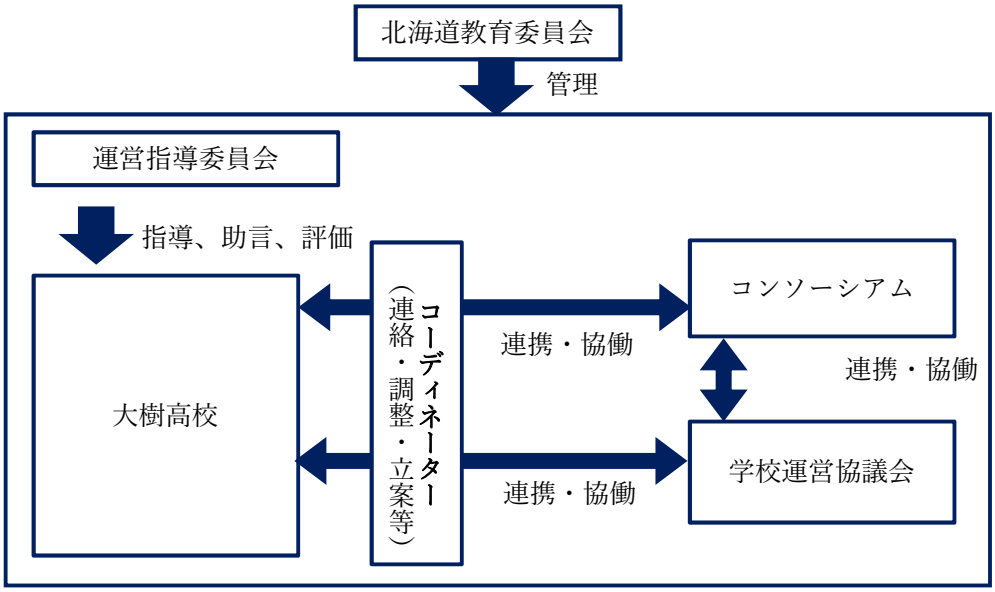
キ　２学年の学校設定科目「情報と宇宙」における、ＩＣＴを活用した大樹町航空宇宙推進室やＪＡＸＡ及び地域宇宙関連企業インターステラテクノロジーズ・北海道スペースポートとの連携授業

（４）本取組を通じて育成を目指す資質・能力

ア　多様な人々が共に生きる社会を支えるために必要な、自他を尊重できる豊かな心（自他の理解・市民性・コミュニケーション能力・社会参画意識）

イ　地域に新たな価値を創っていくために必要な、探究心と協働する力（現代社会の事実的知識・主体性・協働性・思考力・判断力・表現力）

4　実施体制の概要



（1）事業の管理方法

ア　運営指導委員会

北海道教育委員会及び外部有識者等を構成員とした「運営指導委員会」を設置し、専門的見地から指導、助言、評価を行う。運営指導委員会は年２回開催し、進捗状況を確認する。

イ　コンソーシアム会議

コンソーシアムの構成員による会議を開催し、連携・協働体制を評価し、改善等に向けた協議を行う。

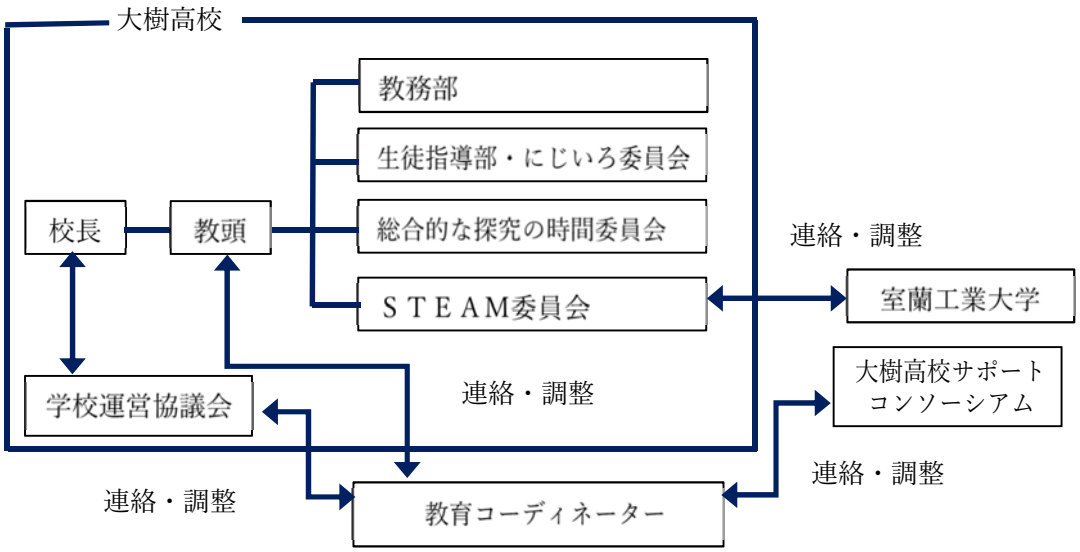
ウ　生徒の研究成果発表会

北海道教育委員会、コンソーシアム構成員及び地域住民などに公開する生徒の研究成果発表会を年１回行い、生徒の学びの成果について指導助言、評価を行う。

エ　教育局による学校訪問

北海道教育委員会の出先機関である十勝教育局（大樹高校が所在する地域に所在）の指導主事が年２回訪問し、事業の取組状況の把握や効果的な取組について指導助言を行う。

2　校内体制の概要



（１）校務分掌（校内委員会）

ア　教務部

教職員研修や授業評価等により、授業のユニバーサルデザイン化及び多様性・共生社会への理解の深化を推進する。

イ　生徒指導部・にじいろ委員会

コミュニケーションスキルトレーニングを中心に、教育相談・インクルーシブ教育を推進する。

ウ　総合的な探究の時間委員会

総合的な探究の時間を中心とした各学年の探究学習について、企画・立案、進捗状況の管理等を行い、中心となって推進する。

エ　ＳＴＥＡＭ委員会

室蘭工業大学との連携授業を核として、複数教科が連携した教科等横断的な学習を推進する。

（２）教育コーディネーター

サポートコンソーシアム（地域・企業・大学等外部の教育的人材）を学校教育活動へ活用するコーディネート・ファシリテート及び地域へ向けた教育活動・成果の周知・広報を行う。

（３）大樹高校サポートコンソーシアム

地域コーディネーターの企画・連絡調整に従い学校の探究学習を中心とした教育活動に参画し生徒へ指導・助言等を行う。

（４）学校運営協議会

地域の活動と学校教育活動との協働について協議し、学校への助言・支援・情報提供等を行う。

5　研究実績報告

（1）事業の実施日程

事業項目	実　施　日　程		
	月	月	月
カリキュラム及び学校設定教科・科目の検討	9月	12月	
コーディネーター配置・業務内容の検討	6月	10月	
コーディネーター研修	8月	11月	3月
運営指導委員会	8月	2月	
管理機関による支援体制の整備	2月		
コンソーシアム協力体制の構築	6月	9月～11月	
先行事例調査研究	11月	1月	
校内研修会	1月		
探究活動成果発表会	7月	11月	
成果報告書の作成	1月～3月		
新学科設置に向けた関係者への説明	11月	2～3月	

（2）事業の実績の説明

ア　カリキュラム及び学校設定教科・科目の検討

令和6年度の新学科設置に向けた教育課程の検討を総合的な探究の時間委員会（12 月）、ＳＴＥＡＭ委員会（9月）で実施した。「総合的な探究の時間」については、新学習指導要領実施へ向けて検討した結果、既に4単位に増単して実施しており、今後のカリキュラム開発に向けては、特色ある学校設定教科・科目「情報と宇宙」（仮称）のシラバスを令和5年度に完成させるとともに、2学年の必履修科目である「情報処理」の中で一部を先行実施し、令和6年度には2学年に「情報と宇宙」を設置して先行実施することを決定し、作業を進めている。

大樹町の特色の一つである航空宇宙産業については、約 40 年前に参入した事業であるが、地域住民の理解に温度差があることが、町が実施した住民アンケート等から分析された。航空宇宙産業を活用して地域課題の解決ができるよう、1学年では航空宇宙関連産業施設の見学と講話、3学年では、総合的な探究の時間での「地域探究活動」において航空宇宙産業を含む地域課題の解決に向けた探究学習を行うこととしている。なお、2学年においては、1、3学年の学びを接続する学校設定教科・科目を開発し、系統性のある教育プログラムとする。開発する教育プログラムの内容は、人工衛星から提供される様々な情報を活用することで、地域に society5.0 社会が実現できる可能性があることを学び、学習した内容を自分や地域住民と結び付けて考察し、地域課題の解決やウェルビーイングの実現に向けた探究活動とする。このような探究活動は、普通科新学科の目的の一つでもある文理横断型の学習となり、地域からのサポートを得て実施することで、航空宇宙産業に対する地域住民の理解の温度差を解消することにもつながると考えている。

室蘭工業大学との連携授業と学校設定教科・科目とを柱とする教科等横断的学習を推進する組織として、今年度ＳＴＥＡＭ委員会を設置した。ＳＴＥＡＭ委員会は地域コーディネーターとともに学校設定教科・科目の単元や内容の検討を進めている。また検討の際には、コンソーシアムメンバーである大樹町航空宇宙推進室及び地域宇宙関連産業インターステラテクノロジーズ

（ＩＳＴ）・スペースコタン（北海道スペースポート運営会社）並びに大樹町航空宇宙推進室を通じて本校と連携しているＪＡＸＡの担当者とも、学校設定教科・科目に関する協議を複数回実施した。さらに、情報の活用に関してＮＨＫ北海道ソリューションとの協議を複数回実施し、本校との連携協働について了承を得ている。

イ　コーディネーターの配置・業務内容の検討

大樹町教育委員会社会教育課地域コーディネーター（小・中学校の地域連携）兼、大樹町学校運営協議会委員でもある神宮司亜沙美氏とデザイナーである橋原靖佳氏、古賀　詠風氏を教育コーディネーターとして８月から学校に配置している。コンソーシアム構築に係る業務や探究学習の企画立案、学校設定教科・科目の設置に係るプログラム開発、学校広報用ポスター等の作成に、本校教職員と連携して取り組んできた。さらに、コーディネーター研修を通して他校コーディネーターとの連携・協力体制を構築している。

〇業務内容

(1) 学校とコンソーシアム構成者との連絡調整
(2) 探究学習の企画立案
(3) 探究学習のコーディネート・ファシリテート
(4) 教員向け研修の企画立案
(5) 学校ウェブページ・SNS 等による学校情報の発信
(6) 学校広報用パンフレット等の作成
(7) その他校長が必要と認める業務

ウ　コーディネーター研修

令和４年度においては次のとおりコーディネーター研修等に参加している。

・８月 19 日　第１回コーディネーター研修（ＣＮ・組織合同研修）（オンライン）
・11 月 25 日　第２回合同研修（オンライン）
・11 月 30 日　第２回コーディネーター研修（オンライン）
・３月 10 日　令和４年度　高校コーディネーター全国フォーラム（対面）
・３月 11 日　第３回コーディネーター研修（対面）

エ　運営指導委員会

地域社会学科を設置するために必要な特色あるカリキュラムの開発や教育内容について、専門的な見地からの指導・助言をするとともに、実施状況等の評価や課題を検討し、指定校の取組の改善・充実を目的として運営指導委員会を開催した。第１回運営指導委員会では令和４年度の実施計画について、第２回運営指導委員会では令和４年度の事業報告及び今後の事業計画等について委員から指導・助言を受けた。

運営指導委員会からの指導助言の主な内容は次のとおり。

・入学した時に、他者と話すことが苦手な生徒が、３年間で原稿を持たずに話せるようになることが大切である。
・発表者が自らのレベルを独りで上げるには限界がある。話し方や謙虚さを得るなど成長するには、他者の研究への関心を高められるかが鍵になる。生徒が発表する前に、どのようなことをすれば質問が出るのかを考えることが、発表の質を高めることにつながる。
・キャリア教育は、キャリアデザインや探究と自分探し、自分崩しが大切である。大人の職業人が何を求めて仕事をしているのかを知るため、大人の人生観と触れる機会を設けることが大切である。

・第１回運営指導委員会　令和４年（2022 年）８月 25 日（木）
・第２回運営指導委員会　令和５年（2023 年）２月６日（月）

オ　管理機関による支援体制の整備

大樹高校新学科構想プロジェクトチームが２月に設置され、総合的な探究の時間及び学校設定教科・科目の系統的なプログラムなど、新学科の教育プログラムの作成、大樹高校と大樹町による取組の接続や教育活動の整理・系統化、新学科の教育プログラムの内容等について、小・中学生及びその保護者への説明、地域住民への情報発信について所掌することとした。

カ　コンソーシアム協働体制の構築

大樹高校と大樹町では、平成 27 年度から３年間、北海道教育委員会より指定を受けた「小中高一貫ふるさとキャリア教育推進事業」の取組により、小中高が接続した学校運営協議会が整備されているが、小中学校で実現している地域学校協働本部の設置と地域学校協働活動推進員の配置が、高校では実現されていないことが課題となっている。今後は、多くの幅広い層の地域住民、団体等が参画し、緩やかなネットワークの形成による、地域学校協働活動を推進する体制が地域社会に関する学科としては適切と考えているため、地域学校協働本部の役割にあたるようなコンソーシアムの構築を推進する。これまでも、地域コーディネーターの斡旋により農業、漁業、商工業、観光、航空宇宙産業など多種多様な人材が、本校の探究学習に個別に参画しているが、今後は農業、漁業、商工業、観光などに係る町内の関係団体・企業にもコンソーシアムの構成員に加わっていただくことを構想している。また、令和４年度は主に学校設定教科・科目「情報と宇宙」の研究開発に関わり、大樹町航空宇宙推進室やＪＡＸＡ及び地域宇宙関連産業、ＮＨＫ北海道ソリューションへの説明と協議を個別に実施してきた。今後、地域の課題解決に向けて生徒が探究できるよう、コンソーシアムの構成員を南十勝（在校生の居住地域）の企業・団体にも参加を呼びかけるなど、組織的に持続可能な連携・協働体制を整備していく。また、室蘭工業大学と大樹町との連携協定における教育分野の取組として、室蘭工業大学連携授業を４回８時間実施することができた。連携授業を通して、大学の講義と高校の授業との違いを縮小するための協議が不十分という課題が見られたことから、次年度へ向けて、課題の解決と連携授業の一層の充実のための協議の時間を確保し、連携内容の質を高めていくよう取り組む。

キ　先行事例調査研究

普通科改革支援事業採択校（地域社会学科）及び地域連携の先進的なカリキュラム開発を進めている学校での調査研究を実施し、訪問校及び本校の取組状況の情報を共有した。事業推進に向けた校内体制や地域と連携した探究活動の進め方等について協議し、今後も各校の教育活動の充実に向け、情報共有しながら連携・協力していくことを確認した。調査研究には、教育コーディネーターも同行し、コーディネーターの役割や業務について検討する機会とした。

北海道大空高等学校の訪問には町の行政機関から２名が同行し、地域連携に関する大空高校の取組を視察するとともに、地域と高校との協働に成果と課題についての共通理解を深めた。

【訪問先高等学校】
・愛媛県立三崎高等学校（11 月訪問）
・北海道大空高等学校（1 月訪問）

ク　校内研修会

本校における本事業の管理方法についての再確認と、本事業を推進する上での課題について、学校全体での情報共有を目的とした校内研修会を１月 24 日に実施し、新学科の名称についても検討した。カリキュラムの研究・開発における学校職員の普通科新学科に対する共通理解や学校の

特色化・魅力化に関する地域への説明等課題が明らかになったことから、課題の解決に対して校内組織（教務部、生徒指導部・にじいろ委員会、総合的な探究の時間委員会、ＳＴＥＡＭ委員会）が連携して対処していくことや、新学科名の候補や決定までのスケジュールについての情報を全体共有した。

ケ　探究活動成果発表会

7月 22 日（金）に３学年生徒により探究活動成果発表会を本校体育館で実施した。地域の課題や関心のある事項について行った探究学習のまとめとして、地域住民や保護者、関係機関に成果を発表することで、本事業の取組についての発信を行った。

コ　新学科設置に向けた関係者への説明

11 月 24 日に開催した学校運営協議会（新学科に関する特別会）において新学科に関する説明とワークショップを実施した。議論を進める中で、学校の特色化・魅力化を目指した新学科の設立により生徒から選ばれる学校となることを期待する声がある一方で、少子化・人口減少が急速に進む地域であり、多様な生徒が集まる都市部の大規模校への進学を目指す生徒が多い中、航空宇宙産業との連携が生徒確保につながるのかという不安もあり、議論が前に進みにくい状況を認識する機会となった。２月に開催した学校運営協議会では今年度の事業報告ならびに今後の事業計画について報告を行い、新学科名に関する意見も聴取した。

管理機関による支援体制として、大樹高校新学科構想プロジェクトチームが２月に設置され、令和５年３月に町内の小学校５・６年生及び中学校１・２年生とその保護者、並びに地域住民を対象とした、本校新学科における学びについての説明会を実施し、地域住民の期待に応える、多様な進路を実現できる高校の魅力について情報発信する。

サ　成果普及のための取組

３学年で行っている「地域探究活動」は、地域の課題解決に高校生が参画することで地域共創を具現化するものであり、今年度についても、探究活動成果発表会での高校生の提言を地域が受け止め、具体的な地域おこしの取組へとつながった。

次年度は、本取組を地域から要望されている「高校生議会」へ発展させ、高校生が町づくりにより一層参画できる体制を整えることで、地域探究活動の成果を地域へ浸透させていく予定である。また、町教育委員会との連携をさらに深め、地域小中高の連携事業である「大樹学」を、地域学習をとおした生徒のキャリア教育プログラムとして発展させていく。さらに、道外他地域の「地域社会に関する学科」設置を目指す高校との交流・連携等も継続して行い、高校生による地域の課題解決への参画や地域の特色・魅力を活かした町づくりへの提言を行う活動の効果を研究内容として、先行事例となるよう、調査研究に取り組んでいく。こうした取組について、地域への説明会や、本校ウェブページ掲載・報道機関への取材依頼・SNS 等の活用により広く成果を発信していく予定である。

II　研究内容

1　大樹スタンダードにおける取組

（1）CST（コミュニケーション・スキル・トレーニング）

目的

ア　第１学年

・自他の個性を受容する柔軟な心を持ち、互いに高め合える集団を作る。

・自らの可能性に気付き、様々な場面で主体的に挑戦する意欲と行動力を育む。

イ　第２学年

・自他の個性を受容する柔軟な心を持ち、互いに高めあえる集団を作る。

・様々な場面で自ら挑戦する意欲と行動力を育む。

ウ　第３学年

・自分の行動が周りにどのような影響を与えるかを考えて行動する意識を育てる。

・自己管理能力の育成。

対象生徒

北海道大樹高等学校　１学年　27 名、2 学年　23 名、3 学年　32 名　計　82 名

活動の概要

令和４年度(2022 年度)　ＣＳＴ

１学年　第１回目：令和４年５月 24 日（火）　５～６校時

第２回目：令和４年 11 月２日（水）　５～６校時

２学年　第１回目：令和４年５月 30 日（月）　５～６校時

第２回目：令和４年９月 15 日（金）　５～６校時

３学年　第１回目：令和４年５月 17 日（火）　５～６校時

第２回目：令和４年 10 月 21 日（火）　５～６校時

成果及び評価

１学年　①「ビヘイビアタイプ診断発表！！」「コンセンサスゲーム～ウインターサバイバル」

②「インターンシップに向けて～ビジネスマナー」「ほめ言葉のシャワー」

「短所を長所に変えたいやき」

第１回目は生徒と教員に事前にビヘイビアチェックシートをやっておいたものを発表する時間とし、「自分を知ろう！仲間を知ろう！」ということで入学してきて間もない１年生に実施。4 種類の動物のタイプに分かれ、それぞれの特徴を知る。個々の違いを肯定的に受け止めることができるように働きかけた。コンセンサスゲームでは、自分と異なる意見を受け入れ、グループとしての見解を出す。自分の意見を整理して伝えることを意識させ取り組ませた。

第２回目はインターンシップに向けて～ビジネスマナーについて、11 月に実施するインターンシップで起こりうる様々な場面に対応するコミュニケーション力をつけるため、場面を想定してロールプレイを実施。後半にはほめ言葉のシャワーとして仲間からの肯定的に評価されることで自身の魅力に気づき、自己肯定感を高める。また自分のウイークポイントを相手からリフレーミングしてもらい、最後には自分でリフレーミングしてみることにより、短所も見方を変えれば長所であることを知り、自分自身を認める気持ちを持てるよう働きかけた。

中学校時不登校の生徒、対人面での課題(場面緘黙、対人トラブルが多い等)をもつ生徒が複数名在籍していますが、集団として楽しく活動することができたようです。中学時不登校や対人面での課題のある生徒に対して心の壁を作らず、ごく自然に受け入れる雰囲気であることが、１学年の素晴らしいところです。参加できた達成感や、集団活動が楽しい！の気持ちが薄れる前に、対人面においての緊張感を緩める活動を継続的に（ＨＲや授業のスキマ時間等を活用して）取り入れることで、雰囲気の持続を図ることができるのではないかと思います。

２学年 ①「仲間探し」「こんな絵かけちゃった」「文化センターまでの道順」

②「つながりを作ろう」「旅行の計画」

第１回目は「認知」について知ることにより、自分と相手の違いを知りどうすれば上手くお互いの思いや考えを分かち合うことができるかを考えさせる。また、作業を協同で行う過程で意志決定や協力のありようについて気づかせるように働きかけた。

第２回目は非言語コミュニケーションの可能性を体感し、その中で心の通じ合いを感じることができるように働きかけていく。また、対人関係において、肯定的に接したり、相手の話をよく聴くことが良い人間関係に必要なことを学ばせる。

２学年の生徒は「相手を思いやる（配慮)」ことや「ルールを守る（遵守)」ことができる生徒は多数在籍しているが、控えめな生徒集団なので遠慮をしてリーダーシップ発揮しないことがあります。しかし、グループ活動ではそれぞれが役割を引き受けうまくまとめていくことができたようです。学校祭や見学旅行などの行事の際には、人間関係でのトラブルも互いの意思を尊重したコミュニケーションをとることができ、大きなトラブルに発展することなく解決できたことは２学年の素晴らしいところです。

３学年 ①「習慣について考えよう」

②新たな環境で感じる不安やストレスを乗り越えるスキル

本格的に始まる進路活動を前に、進路実現に向けて自分の行動が周りにどのような影響を与えるかを考えて行動する意識を育てる。また、自己管理能力の育成をねらいに実施した。

第１回目は自分が身につけている習慣を自覚し、「良い習慣」「悪い習慣」について。また、身につけたい習慣について。自分で考えて行動する。自分に責任を持つことを意識させ取り組ませた。

第２回目は新たな環境で感じる不安やストレスを乗り越えるスキルの育成。また、「批判」にどう対応するかについて考えさせる。

３年生は進路活動において、良好な関係性がみられるようになってきた。

主体的な習慣の獲得に関してワークを行い、人的環境を良好な方向に変えられる考え方を指導した。身勝手な言動は減ったが、満足いく状況ではない。

今後の課題

生徒によっては２時間のＣＳＴは負担が大きかったのではないかと学年では感じました。

活動時の姿勢（表面化しているもの）と感想（内面的な思い）の誤差が大きい。言葉で自己表現ができる、書くことで本音が言えるなど生徒の得意な部分を活用すると、より深く内面にアプローチできるように思いました。

ＣＳＴで学ぶ必要がある』生徒がＣＳＴに参加することを拒み、欠席する傾向が３年感を通してあった。人と関わることが苦手な生徒たちが特にそういった傾向があり、最後まで前向きに取り組む姿勢を身につけさせることができなかった。今ある苦痛から逃避し、向き合うことができない生徒に対してどのように指導していったら良かったのか、CST を通してできることは何だったのか、探究する必要がある。

学　習　指　導　案

日　　時	令和４年５月２４日（火）　５校時	場　　所	体育館
教　　科	ＬＨＲ	授　業 担 当 者	◎中畠、大崎、大寺、前田
単 元 名	第１回 コミュニケーションスキルトレーニング	対 象 者	１年Ａ組　【男子１１名・女子１６名】
本 時 名	ビヘイビアタイプ診断結果発表！！		
１学年目標	自他の個性を受容する柔軟な心を持ち、互いに高め合える集団を作る。		
本時の目標	●ビヘイビアタイプ診断の結果から、自己と他者の個性の違いに関心を持つ。 ●様々な個性を持つ人間がいることで集団が成り立っている面白さに気付く。		
教材・教具	ワークシート（ビヘイビアタイプ診断）（振り返りシート）、資料（ビヘイビアタイプ解説）、 クリップボード２７冊 、デジタイマー、パソコン 、プロジェクター 、マイク		

◇：ＭＴ　◆：ＳＴ　☆：教育補

段　階	学習内容	生徒の学習活動	教員の指導・支援
		☆体育の授業の体形に整列し、座る。	☆ワークシートと Behavior チェックシートをクリップボードに挟んでおく。 ☆パソコン、プロジェクター設置
導入 （５分）	挨拶 本時のねらい	・日直が号令をかける。 ・ＣＳＴの目的を理解する。 ・学習の流れを確認する。	◆目的及び伸ばしたい力を伝える。【中畠】 ＝自分を知ろう！仲間を知ろう！ ＝互いを認め合い、共生することを意識する。 ◇学習の流れを伝える。
展開② （20 分）	ビヘイビアタイプ診断 （行動タイプ診断）	・１学年職員の診断結果（RRWS）について、誰がどの動物かを予想する。 ・４種の動物ごとに分かれる。 ・診断の結果を知る。 ・４種類の動物の特徴を知る。 （良い面、悪い面、上手な付き合い方） ・家族、友人、恋人、職場などの人間関係は、絶妙なバランスで成り立っていることを知る。	☆*１学年団の診断結果を公開！* ※Ｒ(前田ｔ、大崎ｔ)、Ｗ(大寺ｔ)、Ｓ(中畠) ☆Ｒ②(前田ｔ)、Ｗ②(大寺ｔ)、Ｓ②(中畠)、Ｔ①(大崎ｔ) の近くに集まって座る。 ◇ビヘイビアタイプ診断の解説 ➡ どのタイプにも、善し悪しあり。 ➡ 100％ではない。皆、多かれ少なかれ全ての要素を持っている。 ➡ 同一人物でも、時期・立場・状況等に応じてタイプを変化させることも。 **《指導のねらい》** ・人間関係のおもしろさへの気付き。 ・個々の違いを肯定的に受け止める。
まとめ （５分）	本時のまとめ	・ワークシートに感想を記入する。 ・チェックシートはクリップボードに挟み、各自で保管する。	◇時間があれば、２～３名に感想を尋ねる。 ◇デジタイマーをセット（１０分間） ➡ 5h.は、20 分ほど見めて開始の予定。

◎持ち物 ～ 事前用意　　◎服装 ～ ジャージ

学　習　指　導　案

日　　時	令和４年１１月　２日（水）　５校時	場　　所	視聴覚室
教　　科	ＬＨＲ	授　業 担　当　者	◎中島　、大峰　、大寺　、前田
単　元　名	コミュニケーションスキルトレーニング	対　象　者	１年Ａ組　２８名（男子１０名・女子１８名）
本　時　間	・インターンシップに向けて　～　ビジネスマナー		
１学年目標	・自らの可能性に気付き、様々な場面で主体的に挑戦する意欲と行動力を育む。 ・自他の個性を受容する柔軟な心を持ち、互いに高め合える集団を作る。		
本時の目標	・インターンシップで起こりうる場面状況に応じて、適切な言葉で対応することができる。		
教材・教具	パソコン　、プロジェクター　、タイマー　、クリップボード２６冊　、ワークシート ホワイトボード（５枚）　、　ホワイトボードマーカー（黒５本）		

◇：ＭＴ　◆：ＳＴ　☆：黄色等

段　階	学習内容	生徒の学習活動	教員の指導・支援
		☆筆記用具をもって視聴覚室に集合。 ☆席は指定無し。	☆ワークシートをクリップボードに挟んでおく。
導入 （５分）	挨拶 本時のねらい	・日直が号令をかける。 ・ＣＳＴの目的を理解する。 ・学習の流れを確認する。 ・グループごとに机を寄せて座る。	◇目的及び伸ばしたい力を伝える。 ＝ インターンシップで起こりうる様々な場面に対応するコミュ力を身につけよう！ ◇学習の流れを説明する。 ◆活動グループを発表！ ５人×４Ｇ、６人×１Ｇ　（大峰ｔ）
展開② （40 分）	ビジネス マナー	・ワークシートに自分の考えを書き込む。 ・グループで考えを共有し、Good コミュニケーションにたどり着く。 ・グループの結論をホワイトボードに書き込む。 ・発表する。 ・グループ内でロールプレイをする。 （実習生役１名・従業員役１名）×２回 ●アドバイスを受けるときは？ ー正確に業務が進めるためにやるべきこと ●あいさつの極意 ー１回の挨拶で自分の印象が変わる！	◇◆活動内容が理解できていない、または参加が難しい生徒をフォローする。 ◆ホワイトボードとマーカーを配布する。 ①自己紹介 シーン１：　初日、職場の玄関にて シーン２：　初日、皆さんへの挨拶 シーン３：　初日、実習終了時 シーン４：　最終日、実習終了時 ②こんなときを、何と言う？ ー実習中に起こりうる様々なシーンに応じてGood コミュニケーション ③返事・報告 ー返事は的確に、報告はこまめに、正確に。 ☆あいさつの極意 ア：明るく　ウ：先に、爽やかに イ：いつも　エ：常に自分から ◆模範演技（前田ｔ）ー着任初日朝の挨拶を！
まとめ （５分）	本時のまとめ	・ワークシートはクリップボードに挟み、各自で保管する。	◇時間があれば、２～３名に感想を尋ねる。

①自己紹介
②こんなときを…
③返事・報告
をテーマに一巡ずつ

学　習　指　導　案

北海道大樹高等学校　生徒指導部

日　　時	令和４年５月２７日（金）　５～６校時	場　　所	２Ａ教室
教　　科	ＬＨＲ	授業担当者	◎上村、西岡、髙谷、別段
単　元　名	第１回 コミュニケーションスキルトレーニング	対 象 者	２年Ａ組 【男子９名・女子１４名】
本　時　間	①仲間探し②こんな絵描けちゃった～相手との自分の認知の違いについて気づき、共感の気持ちを育む ③文化センターまでの道順～意思決定や協力のありようについて気づく		
２学年の目標	自他の個性を受容する柔軟さを持ち、互いに高め合える集団を作る。 様々な場面で自ら挑戦する意欲と行動力を育む。		
本時の目標	●見学旅行に向け、互いの意思を尊重したコミュニケーションの在り方を考える。 ●自分の言動が周りに与える印象と影響に配慮して発信する意識を育てる。		
教材・教具	模造紙、マジック、デジタイマー、カード片（２３枚）、ワークシート		

◇：ＭＴ　◆：ＳＴ　☆：講師等

段　階	学習内容	生徒の学習活動	教員の指導・支援
	挨拶	・日直が号令をかける	☆生徒たちにカード片を配る
導　入 （25分）	・仲間探しゲーム ・こんな絵描けちゃった	・配られたカード片を合わせて１枚の図を完成させる。図柄をもとにグループを作る。それぞれ自己紹介をする。 ・Ａ４用紙にＭＴからの指示通りに、絵を描く。描けたらグループ内で見せ合い、感想をシェアする。	◇図柄（▽◆◇◆☆）でもつグループを作る。 ◇Ａ４用紙を配布する。 描く図を指示する。 その人がそれぞれ抱いている絵のことを「認知」と言う。自分と相手の違いに気づき、どうすれば上手くお互いの思いや考えを分かちあうことができるか考える。
展開① （35分）	文化センターまでの道順	・情報をまとめながら文化センターまでの道順を模造紙に書いていく。	◇模造紙とマジックを配る。 「情報カード」をグループに配る。
休憩 （10分）			
展開 （30分）	文化センターまでの道順	・全体でそれぞれのグループの道順を発表する。 ・ふりかえりシートに記入。グループで感想をシェアする。全体でワークから気づいたことをシェアする。	◇ワークシート・ふりかえりシートを配る。 自分の伝えたいことを伝えることができたか？他のメンバーの伝えたいことを聞くことができたか？協力して作業を進めていく中でグループのメンバーのコミュニケーションで印象に残っていることや感じあったことは？
まとめ （10分）	本時のまとめ 振り返り	・学校生活の中で、クラスの人間関係について見直していく。 ・日直が号令をかける。	◆西岡ｔ・髙谷ｔ・別段ｔからひと言ずつコメントをして伝える。

学　習　指　導　案

北海道大麻高等学校　生徒指導部

日　　時	令和４年９月１５日（金）　５～６校時	場　　所	２Ａ教室
教　　科	ＬＨＲ	授　業 担 当 者	◎上村、西岡、高谷、別段
単 元 名	第２回 コミュニケーションスキルトレーニング	対 象 者	２年Ａ組 【男子９名・女子１４名】
本 時 間	①こんな絵描けちゃった②つながりを作ろう～相手との関わりについて気づき、共感の気持ちを育む ②旅行の計画～肯定的・否定的な対応で相手がどう感じるかについて気づく		
２学年の目標	自他の個性を受容する柔軟な心を持ち、互いに高め合える集団を作る。 様々な場面で自ら挑戦する意欲と行動力を育む。		
本時の目標	●見学旅行に向け、互いの意思を尊重したコミュニケーションの在り方を考える。 ●自分の言動が周りに与える印象と影響に配慮して発語する意識を育てる。		
教材・教具	丸シール（５色）、模造紙、マジック、デジタイマー、役割カード、ワークシート		

◇：ＭＴ　◆：ＳＴ　☆：教師等

段　階	学習内容	生徒の学習活動	教員の指導・支援
	挨拶	・日直が号令をかける ・机を教室の隅に寄せて、椅子で丸く内側を向き座る	☆教室の明かりを消して、落ち着ける音楽を流しておく。
導　入 (25分)	・リラクゼーション ・つながりを作ろう	・目を閉じてリラックスできるように呼吸を整えたり、手を動かしてみる ・額に貼られたシールを指示通りに、無言で並ぶ ・正しくつながって並んだが確認できたら、ふりかえりシートに記入。２～３人で感想をシェアする。	◇生徒たちが目を閉じている間に額にシールをランダムに貼る。 ◇ふりかえりシートを配る。 ◇教示内容を読み上げる
展開① (25分)	こんな絵描けちゃった	・額に貼られたシールの色別にグループを作り、グループ毎になるよう机を寄せる。 ・情報をもとにメンバーが順に絵を描いていく。 ・作品に題名をつける。 ・全体でそれぞれのグループの作品を発表する。 ・ふりかえりシートに記入。グループで感想をシェアする。全体でワークから気づいたことをシェアする。	◇模造紙とマジックを配る。 ◇「練習」を読み上げる。 ◇ふりかえりシートを配る。
休憩 (10分)			
展開② (40分)	旅行の計画	・各グループでそれぞれメンバーが役割カードに書かれたコミュニケーションのとり方を意識しながら、旅行の計画を立てる。 ・全体で各グループの立てた旅行計画を発表する。 ・ふりかえりシートに記入。 ・全体でワークから気づいたことをシェアする。	◇模造紙・役割カード・ワークシート・ふりかえりシートを配る。 【役割カード】 ①進行役　②好意的　③肯定的　④自分の気持ちを出さない　⑤否定的　⑥あきれたような態度
まとめ (10分)	本時のまとめ 振り返り	・見学旅行に向けて、クラスの人間関係について見直していく。 ・日直が号令をかける。	◆西村ｔ・高谷ｔ・別段ｔからひと言ずつコメントをしてもらう。

学　習　指　導　案

日　　時	令和４年１０月２１日（火）　５校時	場　　所	３Ａ教室
教　　科	ＬＨＲ	授　業 担当者	南部
単　元　名	第２回 コミュニケーションスキルトレーニング	対 象 者	３学年　３２名
本時の目標	新たな環境で感じる不安やストレスを乗り越えるスキルを育成する。		
教材・教具	ワークシート、振り返りシート、資料		

段　階	学習内容	生徒の学習活動	教員の指導・支援
		教室で着席する。	・プリントの配布
導入 （５分）	挨拶 本時のねらい	・日直が号令をかける。 ・ＣＳＴの目的を理解する。 ・学習の流れを確認する。	・目的及び伸ばしたい力を伝える。 ・新たな環境で感じる不安やストレスを乗り越えるスキルの育成 ・学習の流れを伝える。
展開① （38 分）	問：皆さんは、どのようなことに「不安」や「怒り」を感じますか？		
	・「不安」の可視化と数値化 ・「不安」が発生した際の身体反応と対処法 ・「怒り」の可視化と数値化	・ワークシート①「不安の感情チェックリスト」を見て、20 問の質問に答える。（５分） ・チェックした「不安」について、それがどの程度の不安なのか、100 を最大値として数値化する。（３分） ・「不安」に遭遇した場合、心と身体はどのように反応するか考察する。（５分） ・「不安」への対処法を考える。（５分） ・グループをつくる。（５人×６程度） ・チェックした「不安」とその数値、「不安」への対処法をグループメンバー内で共有する。（10 分） ・早めに終わった場合またはグループワークが難しい場合は、ワークシート②「怒りの感情チェックリスト」を見て、20 問の質問に答える。（10 分）	・「ワークシートの 20 項目の中で当てはまるものがあれば、チェック欄に○をつけてください。それ以外にも不安を感じる状況を思いついたら、下に挙げてください。」 ・「○をつけた状況がどのくらいの不安の強さであったか、100 を最大、０を不安なしとして、どの程度だったか書いてみましょう。」 ・「不安を感じたとき身体にどんな変化が起こるでしょうか。例えば心拍数・呼吸・筋肉・姿勢など思いつくものを書いてみましょう。」 ・「皆さんは不安なときにどのような対処をしていますか。書いてみましょう。」 ・グループを黒板に掲示 ・「グループ内でチェックシートを回し、他の人がどんな意見を持っているか、共有してみましょう。」 ・ワークシート②配布 「怒りについても同じようにチェックしてみましょう。また、過去の対処法を思い出して、別の対処法がなかったかを考えてみましょう。」
まとめ （７分）		・自分がどのようなストレスに対して「不安」や「怒り」を感じ、どのような反応を起こしやすいのかを分析する。	・「人によって不安が感じる状況は違うこと、同じ不安でも個人差があることが感じられましたか。」 ・「怒りも同じです。この用紙を使って、過去の対処法の検証ができます。ぜひ活用してください。」
休憩 （10 分）	休憩	・休憩する。	・次時の準備を行う。 ※次時は p.5 のプリントを実施（20 分）。

（２）高等学校における通級による指導　『放課後活動』

目的

生活上や学習上における不安や困難さを抱えている生徒のうち、希望者を対象に、その改善と克服を図るための「自立活動」（本校では放課後活動と称する）を実施する。進学や就職など、進路実現に向けた知識やコミュニケーション能力等を伸ばすとともに、卒業後の自立と社会参加の基盤となる力を育むことを目的とする。

高等学校において通常のカリキュラムで学びながら、一部、困り感に応じた特別な指導を通級指導教室にて受ける指導形態である。本校では、７年前から通級指導担当教諭が１名配置されており、自校通級による自立活動の指導を行っている。

対象生徒

第２学年　男子生徒　１名　【コミュニケーション力、生活力、主体性の向上を目指す。】

第３学年　男子生徒　１名　【コミュニケーション力、読み書き、手指の巧緻性の向上を目指す。】

受講の条件

ア　本人又は保護者が、生活上や学習上に不安や困難さを感じている生徒。

イ　学年及びにじいろ委員会において、自立活動の指導が必要であると判断された生徒。

ウ　原則として、本人・保護者の両者が受講を希望していること。

活動の概要

ア　活動日時

第２学年　毎週木曜日　15:45～16:40

第３学年　毎週火曜日　15:45～16:40

※グループ活動については、木曜日に２・３学年合同で実施。

※長期休業期間または臨時的な活動については、生徒の要望に応じて別途設定した。

イ　指導内容

（ア）ソーシャルスタディー

対人関係の構築や社会生活スキルの獲得を目指す。自立活動の指導６区分のうち、特に「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「コミュニケーション」の４区分に当たる内容について個別指導を行う。

（イ）グループアクティビティー

個別指導で身に付けたスキルを、グループ活動（教員含む２名以上）において実際に表現する。模擬場面や他者との対話等を通じて体験的に学びを深めることにより、身に付けた知識を実際の場面に活かす力を育む。

（ウ）ベーシックスタディー

基礎的・基本的な学習内容の定着を図ることを目的として、学習の基礎となる認知機能を高めるトレーニングを行う。原則として教科の学習は行わないが、生徒からの要望があれば、通常の授業への参加をスムーズにするための予習（教科書の音読、漢字の読みの確認等）を行う場合もある。

ウ　指導書・参考文献

宮口幸治（2019）『１日５分！教室で使えるコグトレ』東洋館出版社

北出勝也（2013）『子どものビジョントレーニング』ＰＨＰ研究所

LD 発達相談センターかながわ（2015）『あたまと心で考えよう SST ワークシート思春期編』かもがわ出版

エ　指導の実際

（ア）ソーシャルスタディー　～ソーシャルスキルトレーニング

社会生活を営むために必要な知識や考え方と、良好な人間関係を築く力を身に付ける。具体的には、「身だしなみ」「自己理解、他者理解」「気持ちや感情」「トラブル対応シミュレーション」「スケジュール管理」などである。教材は、上記の指導書・参考文献から生徒の実態に合わせて選定し、実態にそぐわない部分については一部を書き換えるなどして使用した。

（イ）グループアクティビティー　～ソーシャルスキルトレーニング

長期休業明けや行事等の後に、自分の考えやエピソードなどを伝え合う学習を行った。話し手は、５W1H を基本に分かりやすく伝わるよう意識すること。聞き手は、第一段階「聞く姿勢（相づちを打つ、否定しない）の意識」、第二段階「聞き取った内容を簡潔にメモする」、第三段階「話し手に対して質問をする」というステップで指導を展開した。

（ウ）グループアクティビティー　～コミュニケーションゲーム

コミュニケーションに特化したカードゲームを用い、他者との関わりを楽しみながら語彙力やコミュニケーション力を伸ばす。

ａ．ボブジテン

カタカナ言葉（和製英語含む）についてカタカナを使わずに説明するゲームである。様々な言葉に置き換えて表現したり、相手の言おうとしていることを推測したりと思考を巡らせることにより、語彙力の向上を図ることができた。

ｂ．キャット＆チョコレート

提示されたミッションについて、手持ちのアイテムカード３枚を用いて解決していくゲームである。状況に応じて臨機応変にストーリーを構成する力や、発想力を磨くことができた。回答はユーモアに富み、伸び伸びと表現する様子が見られた。

ｃ．ちょこっとチャット

カードに書かれた質問について、的確に自らの回答を示す活動である。「もしも５万円あったら、何に使いますか？」など比較的答えやすい質問から始め、生徒の実態に応じてより複雑な回答が求められる質問カードを加えながら指導を進めた。特に後期からは、３年生の面接対策として多めに取り入れた学習である。

（エ）ベーシックスタディー　～コグニティブトレーニング（コグトレ）

見る・聞く・想像する・注意するなどの認知機能の改善と向上を図るトレーニングである。３学年生徒（以下、生徒Ａと記述）に実施した。

ａ．覚える

【視覚性の短期記憶】

●４×４のマス目にランダムに描かれている５つの数字や記号とその位置を１０秒間で記憶し、白紙のマス目に描き写すトレーニングにより、視覚性の単純短期記憶と視空間ワーキングメモリの強化を図った。生徒Ａは、開始当初は誤答（数字や記号は合っているが位置が異なる）が多かったが、回を重ねるごとに正答数が増加した。

【聴覚性の短期記憶・文章理解】

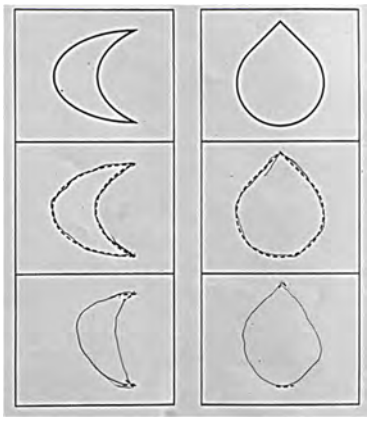
●短い文章を聞き、最初の単語を記憶する。その間に、ある決められた単語が出てきたときには即座に手を叩くという動作を行いながら、記憶を保つトレーニングを行った。生徒Ａは、単語の記憶は非常に正確であるが、手を叩く動作が遅れがちになることから、目と手の協応に難しさがあると考えられる。

●文章を理解して覚え、問いに答えることで、文章理解力と聴覚（言語性）ワーキングメモリを強化するトレーニングを行った。生徒Ａは、難易度の高い文章についても即座に正答することができることから、視覚＜聴覚優位であることが窺える。

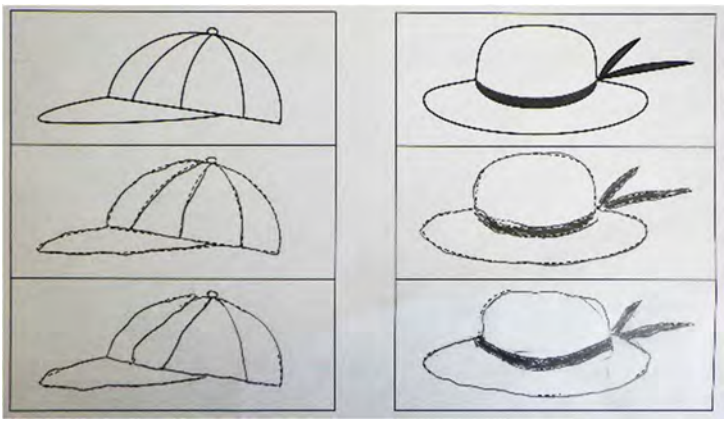
ｂ．写す

見本を正確に模写することで、視覚認知の基礎力を育てるトレーニングである。

生徒Ａは、『点つなぎ』『曲線つなぎ』のトレーニングを重ねることで、以下のような認知の向上が見られた。



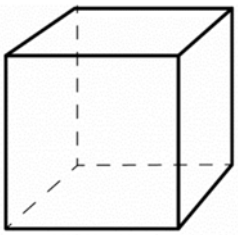
【１年・12 月】単純な図形の模写。形状のいびつさについて、具体的に指差し等で示されても、理解が難しい様子であった。点線を正確になぞることができていない図形もあった。



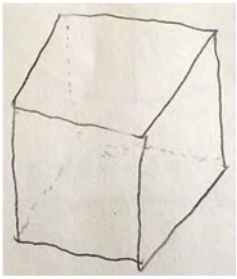
【２年・２月】点線部分は正確になぞられている。少々複雑な図形でも、大きさや形状の違いに自ら気付き、何度も描き直す様子が見られた。「まだ多少いびつだが、どの部分をどのように修正したら良いか分からない。」と描き終えた。

立方体の模写

生徒Ａが立方体を模写したもの。１年の１２月には形を整えることができなかったが、３年の８月には形をほぼ正確に捉えることができるようになっている。観察力や、空間認知力の向上がうかがえる。

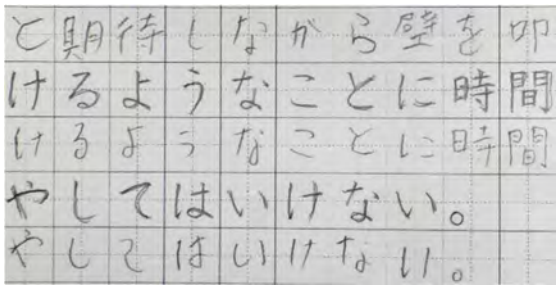


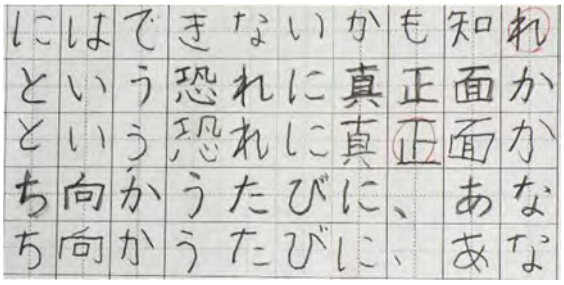
【１年・12 月】



【３年・８月】

（オ）ベーシックスタディー　～硬筆書写





【１年・12 月】枠からはみ出す、字形が乱れるなどの課題あり。全体的に角が丸く、線が流れている。曖昧に覚えている文字も多く、丁寧に書く意識は持てていない。

【２年・２月】枠からはみださず記入している。全体的に角を意識でき、筆圧が上がっている。『い』『て』など画数の少ない文字を、ごまかさず丁寧に書こうとしている。

３年・８月には、進学希望先に提出する書類の作成を行った。文字の大きさや高さを整えるため、記入欄に等間隔で罫線を引くように見本を提示して指導した。指導開始当初は、定規で測って点を打ったり、定規を非利き手で押さえながら線を引いたりすることが難しかったが、４～５回の練習によりコツをつかみ、見本の通りに罫線が引けるようになった。また、４～５㎜四方の文字を、おおむね大きさをそろえて枠内に書けるようになった。

（カ）ベーシックスタディー　～手指トレーニング

「手指の動作をスムーズにする」「手と目を協調させ、細かな作業を正確に行う」ことを目標として手指トレーニング（微細運動、協調運動）を行った。トレーニング開始時は、下記の画像ａ、ｂの通り全体的に手指に力が入りこわばっている。しかし、３年・７月には手指を柔らかく使えるようになってきた様子が見て取れる。

【2 年・6 月】

ａ．ビーズ作業
～ 箸でつまむ、糸を通す、結ぶ

【2 年・6 月】

【3 年・7 月】

ｂ．折り紙作業
～図を読み取る、折る、切る、ちぎる

（キ）ベーシックスタディー　～ビジョントレーニング

文章の読み方がスムーズでなかったり、勝手読み（字面からの早とちりや思い込みによる読み間違い）が多かったりと音読に困難さが見られた。音読の様子を観察したところ、文章を目だけで追うのではなく、頭ごと動かして読み進めるため、一文字ずつ読むようなぎこちない読み方になっているのではないかと予想された。

この課題を克服するため、ランダムに並べられた文字や数字を注意深く正確に読んだり、目を素早く動かしたりする眼球運動のトレーニングを行った。これにより、文章を読む際には、言葉を文節ごとのまとまりとしてとらえながら読み進めることができるようになった。本人の感覚としても、文章をスムーズに読めるようになってきたことを実感している。

成果及び評価

ア　一斉授業への適応

（ア）見る、聞く、書く、話すなどの力を高め、認知機能を強化することにより、理解力の向上を図ることができた。

（イ）生徒の希望に応じて、授業や新たな活動への準備を行うことにより、不安感の軽減と学びの定着に寄与することができた。

イ　自己理解・自己受容

（ア）自身の得意、不得意を知ることができた。

（イ）自身の持つ課題や困り感について、その克服や代替のための方法があることを知ること。また、自らの成長を実感する経験を積むことによって、個性を肯定的に受け入れることができるようになった。

ウ　自発的な行動

（ア）コミュニケーション力の向上に伴い、クラスメイトや教職員との人間関係の幅が広がりつつある。

（イ）教員への報告・連絡の経験を積むことにより、困ったときやわからないことなどについて、親しい教員やクラスメイトに対し自ら援助を求めることができるようになった。今後は、受け身や指示待ちの姿勢の改善へとつなげていきたい。

エ　クラスメイトとの関係性

（ア）相手の立場や気持ちを理解して関わろうとする様子が見られるようになってきた。また、クラスメイト側も本人の個性を受け入れ、自然な関わりの中でフォローする体制ができている。

（イ）クラスメイトとは対等な関係であり、「嫌なことは嫌と言う」「友達≠支援者」という認識が芽生えつつある。

オ　定期的な支援

（ア）週に１回、困り感の確認とフォローをする時間が確保できた。

（イ）対象生徒の困り感や対応について関係教員と共有することで、連携して指導できた。

今後の課題

ア　指導時間の確保

対象生徒が進学者向けのＴ－Ｐｌｕｓを受講する場合、実施時刻が重複するため、毎週木曜日に放課後活動を設定することができない。その他の曜日に行うことは可能ではあるが、部活動や会議等により定期的な指導時間の確保は難しくなると予想される。

イ　対象生徒の選定

担任を通じて本人に声掛けをしたものの、同意が得られず、指導対象にできない「気になる生徒」が複数在籍している状況である。本校では学びのユニバーサルデザイン化に取り組んでいるが、個別の支援を要する生徒への対応としては充分とは言えない。

ウ　指導者の育成・人材確保

全ての教職員が特別支援教育について理解を深め、自立活動の指導を誰でも担当することができることが理想である。しかしながら、本校の場合は非常に多忙であり、『放課後活動』は担当者と一部の教員のみでの運営にならざるを得ない状況である。そのため、自立活動の指導を主として担うことのできる人材の育成は進んでいない。通級指導担当教諭の加配がつかない場合の指導者は明確にされておらず、活動の継続が危惧される状況である。

（３）SDGs ワークショップ　（総合的な探究の時間）

目的

JICA 北海道（帯広）主催の講話を聞き、SDGs に関わるワークショップに参加する。自分の意見を持ちつつ、他者の意見に耳を傾けることで、SDGs への理解を深める。

対象生徒

第２学年Ａ組（男子９人、女子１４人、合計２３人）

活動の概要

日　時　令和５年（2023 年）２月９日（木）　５、６校時（13:25～15:15）　途中 10 分間休憩

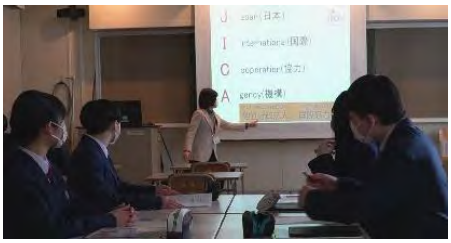
場　所　本校視聴覚室（３階）

形　態　５グループ（４人、４人、４人、５人、５人）　当日欠席者１人

講　師　JICA 北海道（帯広）道東業務課　野々垣　真実　（ののがき　まさみ）様

テーマ　「共生社会を実現するための SDGs」

内　容



ア　JICA 北海道（帯広）の活動について

(ｱ) JICA 北海道（帯広）職員の野々垣様より JICA（Japan International Cooperation Agency）独立行政法人国際協力機構の活動内容について、PowerPoint によるスライドを用いて説明を受ける。

(ｲ) 先進国（約 40 カ国）と開発途上国（約 140 カ国）の定義及び主な国々の GNI（Gross National Income=国民総所得）について学ぶ。開発途上国は全世界の約 70%を占める。

(ｳ) 世界は今、未曽有の課題に直面している。気候変動（森林火災、氷河解氷、野生生物絶滅の危機）、紛争と暴力の時代、人口動態の変化、格差社会、分断、パンデミック、食料問題等様々なグローバル課題があることを動画で学習する。この状況が続けば、地球が立ち行かなくなってしまう。解決を急がなければならない様々な問題を SDGs と呼ぶことを学ぶ。

(ｴ) 十勝の「資源」（強み）と世界の様々な「課題」をつなぐことによって、解決を図っているのが JICA 帯広の働きであることを学ぶ。

イ　SDGs アクションカードゲーム”X”（金沢工業大学制作）を通して SDG s について学ぶ。

(ｱ)課題と資源をつなげて行動に移すカードゲームに取り組む。（グループ毎に話し合う。）

ゲームの流れ　①じゃんけんで順番を決める。

②1 番目の人は、リソースカードを一人３枚ずつ配る。

③「お題」を確認。

④リソースカード１枚を使って、課題解決のアイディアを発表する。

◎「お題（解決すべき課題）」

環境のためにエアコンを使わないようにしたら、熱中症になった。（SDGs　⑬気候変動）

⇩　⇧

◎「手札　リソース（資源）」

職人：通気性のよい服を作ってもらう。

スマホ：119 番通報する。

お祭り：外に出れば、夜は暑さを凌げる。

家具：素材で涼しい家具を買う。

カードゲーム（10 分間）（グループ毎にお題カードを引き、リソースの活用を発表し合う。）

◎「お題（解決すべき課題）」

無限に森林を増やし過ぎた結果、花粉症の人が急増した。

⇩　⇧

◎「手札　リソース（資源）」

農家：木を伐採してもらう。

建築：家を建ててもらう。

SNS：家の販売のために情報を拡散のために SNS を利用。

◎「お題（解決すべき課題）」

自殺しそうな友達の相談に乗っていたら、自分も鬱になった。

⇩　⇧

◎「手札　リソース（資源）」

音楽とスポーツ：気を紛らわす。

花と風呂：花を浴槽に浮かべて入浴する。

有名人：人気スターに会い気持ちをリフレッシュする。

(ｲ)トレードオフ（一つの課題に取り組むと、また一つ別の課題が発生すること）について学ぶ。

一人ひとりが推しゴール（SDGs17 目標から 1～2 の目標を決めて行動する。）に取り組むことで、トレードオフが解消されるようになることを理解した。

ウ　大樹町のリソース（資源）について学ぶ（グループ毎に取り組む）

生徒が住んでいる町から、様々な資源の有効活用が考えられる。その良いところ、強いところ、得意なところを、社会的な課題に結び付けて課題解決をしていくことを学ぶ。

	ひと	もの	場所
個人レベル			
町・十勝レベル	町長 宇宙少年団	ヒロセのワッフル 小麦の奴隷のカレーパン キャンドル 乳製品	大樹高校 晩成温泉 キャンプ場 コスモール大樹 海
北海道全体 日本	インターステラ 堀江貴文 杉森輝大（スピードスケート）	ロケット	宇宙交流センター

生徒の感想

・JICA の活動内容を詳しく知ることができた。

・SDGs をカードゲームを通して楽しく学ぶことができ、改めて課題の多さに気付くことができた。

・グループディスカッションで、みんなと協力して他人の意見も大切にし、広く様々な課題解決策を考えることができた。

・SDGs は世界規模で考えると、どこか遠い国の話に聞こえるが、自分達の日常生活の中で、できることを見つけて取り組んでいきたい。

・トレードオフという考え方を知り、周りと協力して自分ができることを探したいと思いました。

・大樹町には資源がたくさんあることがわかり、一見無関係なものも、よく考えると使い道があることに気付いた。

成果及び評価

・すべての生徒が SDGs アクションカードゲームに積極的に参加した。

・各グループの話し合いは、様々なアイデアが飛び交い活発な活動となった。

・正解のないお題に対して、物事を自由に発想できることもあり、リソース（資源）の活用方法を様々な視点から考えることができた。

・グループで話し合われた事を、積極的に全体に発表し、情報共有することができた。

・すべての生徒が SDGs に高い関心を持つことができた。

・SDGs は地球規模の課題ではあるが、自分達を取り巻く地域社会の身近なところにある「もの」・「こと」・「場所」等のリーソース（資源）を結び付けることで、様々な問題解決策を考えることができた。

・生徒は今まで関心のなかったことにも目を向け、自分のできる範囲で SDGs に取り組む姿勢・態度が身に付いた。

今後の課題

・SDGs を学んだ直後は意識が高まるが、その後も継続して行動に移すとともに、情報収集により現状を把握することが求められる。

・自分の SDGs に関わる考え方を、積極的に周りの人に拡散させていくには、能動的な態度と勇気が必要になる。

・３年生に進級し、自分の将来を見据えた進路活動を考えるとき、目前の様々なやるべき課題に対して、リソース（資源）を結び付けて課題解決を図ることが求められる。

2　大樹学 PLUS における取組

（1）インターンシップ

目的

・「読む・書く力」「表現力」「共生する力」を養う。

・職業体験を通して、その業務内容や働くことへの理解を深める。

対象生徒

1 学年　27 名

活動の概要

大まかな活動の流れ

月　日	スケジュール
10 月中旬	〈探究〉事前学習 ・目標および課題設定 ・事業所への電話連絡 ・履歴書書き
11 月 10 日(木)～11 日(金)	インターンシップ
11 月 14 日以降	〈探究〉事後学習 ・振り返り ・礼状書き ・報告会準備　※情報Ⅰにてプレゼンテーション資料作成
12 月 9 日（金）	インターンシップ実施報告会

令和 4 年度　実習先一覧

大樹郵便局	ホテルアルコ	ライトオン　イオン帯広店
和風イタリアンちょっと	忠類へき地保育所	ペットワールド帯広店
大樹国保診療所	メムアースホテル	道の駅コスモール大樹
セブンイレブン大樹西本通店	中札内中学校	ＪＲ北海道　帯広保線所
ＪＡ大樹町	更別中央中学校	にれの木動物病院
認定こども園　たいき	食堂このみ	十勝整形外科クリニック
		ベルクラシック　帯広

ア　事前学習

・目標および課題設定

1 学年のインターンシップにおいては、生徒それぞれが目的意識を持って臨むことを丁寧に指導した。「職業観を身につける」「仕事の普段見ない一面をしっかり理解する」など、「働くことの意義」についてグループワークを行いながら考える時間を設けた。

・事業所への電話連絡

目標を定めた上で、企業との初めての直接的なやりとりとなる電話連絡（アポイントメント）を実習先毎に実施した。インターンシップ当日までの事前準備や、当日のスケジュール確認を電話を通じて行うことで、インターンシップに参加する実感を持ち始める。生徒はよい緊張感を持って丁寧に、真剣に取り組むことができていた。

・履歴書書き

電話連絡と並行して、企業に提出する履歴書の作成も実施した。３年次で進路に関わる公的な文書を作成する生徒が大半であることを鑑みて、１年次より「美しく丁寧に、正しい言葉遣いで」履歴書をまとめるということを心がけながら指導を行った。

イ　インターンシップ

２日間にわたるインターンシップは、各事業所ごとに集合場所・集合時間が異なるため、それぞれが電話連絡で確認した内容を基に各自で企業まで赴くところから始まる。教員は巡回のみとなるため、それぞれの生徒が活動した内容は、「実習日誌」という形で記録として残るようにした。

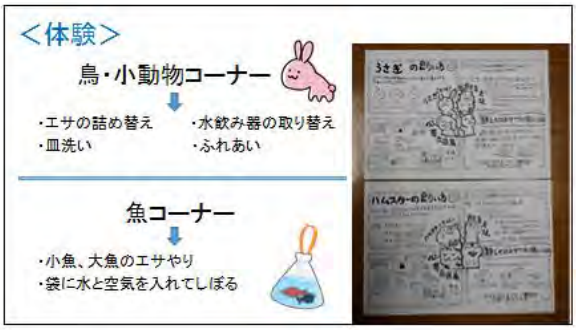
ウ　事後学習

・実習先へのお礼状作成

実習後は、お世話になった企業に対してお礼状を作成する。履歴書書きでの学びを生かし、丁寧に書くことがしっかりと身についている生徒が多くみられた。

・報告会に向けたプレゼンテーション資料の作成

「情報Ⅰ」の授業を活用し、報告会に向けたプレゼンテーション資料の作成も企業毎に行う。「相手に伝わる表現方法」を目標としてそれぞれが工夫し、パワーポイントや説明台本をしっかりと作りこむことができた。



エ　報告会

活動の集大成として、御協力いただいた企業、保護者に案内を出し、本校体育館にて報告会を実施した。１年生にとっては高校生活の中で最も大きな舞台での発表の場となった。実習先毎に体験した内容を発表し、発表後には相互に Google スプレッドシートを活用して感想を寄せ合う活動を盛り込んだ。さまざまな職業に対する見聞を深める時間を作ることができた。

成果及び評価

高校１年生段階においては、卒業後の進路がまだ定まっていない生徒がほとんどである。２日間という長時間にわたる実習を通じ、普段見ることのできない仕事の一面を肌で感じることのできる体験プログラムとなっている。インターンシップを通じ、「働くこと」の意義や、職業に対する理解が深まり、その後の進路活動に生かされている。

今後の課題

コロナ感染症蔓延防止の観点から、報告会の来場者を減らして実施している現状がある。地域の方にも、活動をより広く知っていただけるように、工夫していくことが課題である。

（２）見学旅行教科等横断型学習

目的

関西地方についての理解を深め意義ある見学旅行にする。１日を通して様々な教科等の視点から学習することで物事を多角的に捉える経験を積む。

対象生徒

２学年 23 名

活動の概要

令和４年９月 22 日（木）を「関西見学旅行１日事前学習日」として各教科の授業と LHR を活用して教科等横断型学習を実施した

ア　１校時　現代文 B「関西地方の方言」

方言を題材に、言葉や文化、コミュニケーションの取り方の違いについて学習した。

イ　２校時　地理「関西地方の歴史と文化」

古墳群、仏像、寺院などの建造物について、地理的背景や歴史的背景を資料を交えて学習した。

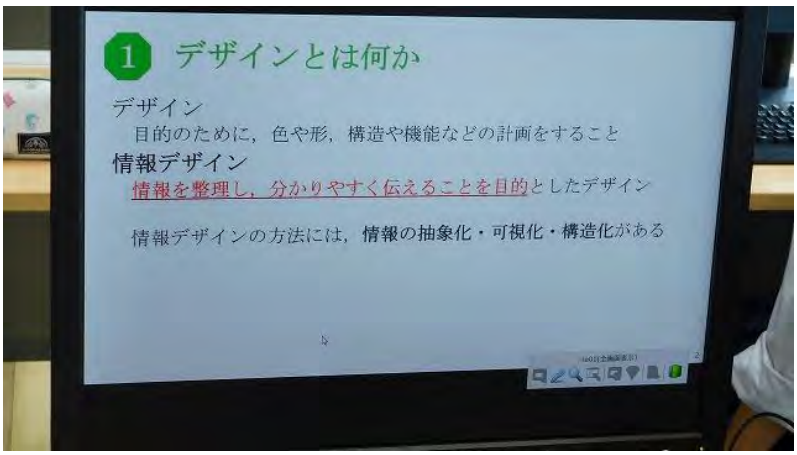
ウ　３～４校時　　LHR「関西地方の食文化・京料理の調理」

家庭科と学年団で実施。

京料理と四季の関わりについて、食材や調理法を中心に動画を交えて学習した。実習として関西風の出汁を用いた手打ちうどんを調理し試食した。

エ　５～６校時　情報処理「情報デザイン・見学先の見どころポスターの作成」

他者に伝えるための情報デザインについて学習し、班ごとに担当する見学先を決め情報収集を行った。その内容をもとに A3 の PR ポスターを作成しクラス全体で見学先の見どころを共有した。



オ　その他

事前学習日以外でも、音楽Ⅱ（清水寺に関連した楽器）や総合的な探究の時間（防災学習）などで見学旅行に関連するトピックを扱った。

また、事前学習日の活動の様子（写真）や作成したポスターなどは教室前の廊下に貼り出し、２学年生徒がいつでも学習を振り返られるようした。また、他学年の生徒・教員にも活動の内容を発信することができた。

成果及び評価

様々な視点で関西地方についての理解を深めることができた。学年団だけの事前学習では各題材を深く掘り下げることはできず、各教科で分担し専門性を活かすことで深い学びになった。見学旅行中の施設見学や食事の際に、生徒が事前学習で扱った事項を思い出している様子が見られた。

見学旅行に限らず、各教科の授業で扱う内容が相互に関連しながら実社会とつながっていることを実感させることができた。

今後の課題

台湾見学旅行を実施する場合は、義守大学との交流のための準備（日本・大樹町の紹介など）にも時間を割く必要がある。各教科の授業と総合的な探究の時間をリンクさせて計画を立てる必要がある。

（3）台湾義守大学との文化交流

目的

ア　異文化体験により国際理解を深める

イ　ＩＣＴを活用したリモート交流による多様性・多文化共生の理解を深める

対象生徒

全生徒（1 学年：27 名、2 学年：23 名、3 学年：32 名）

活動の概要

ア　取り組みの経緯

本校では、平成 30 年より見学旅行先として台湾を採用している。異文化に触れると同時に、台湾義守大学を訪問し、学生との文化交流を進めている。翌年も台湾見学旅行を実施することができたが、それ以降は新型コロナウイルス感染症の影響で中断している現状である。

そのような中、義守大学側からの申し出があり、今年度は「影絵人形劇」を通しての文化交流を実施した。義守大学企画管理学科（荘苑仙先生）では、社会奉仕の一環として、地元台湾の影絵人形劇をより多くの人に広めるためのプロジェクトを立ち上げ、台湾高雄大樹区とつながりのある北海道大樹町の大樹高校との交流が計画された。

イ　事前学習

まず、影絵人形劇とはどのようなものか、本校生徒に理解を深めてもらうことを目的に、「影絵人形劇簡易パック」が現地から送られてきた。これは、影絵人形劇を行う際に使用する人形を、手軽に作れるように用意されたものであり、制作することによって影絵人形劇を身近に感じてもらうことが目的である。同時に、作り方をわかりやすく説明した動画（義守大学生作製）も送られてきて、本校生徒はそれを視聴し台湾文化に触れながら楽しく制作できた。

ウ　接続事前テスト

9 月 28 日　午後 5 時より実施。台湾と本校の会場となるすべての教室について接続テストを行い、人形劇の見え方や音量など細かなところをチェックした。

エ　当日の様子

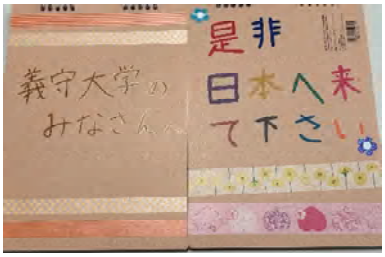
スケジュール（台湾担当者から示されたもの）

10 月 5 日 台湾時間 12:30(日本時間１３：３０)	
香川県白山小学校　ワレット先生	
北海道大樹高校　森先生	
場所	国際ビル五階　中華文化教室
12:00	プロジェクトメンバー到着
12:30~40	開会の挨拶(山極匠朗は義守大学の学生を代表して、挨拶する。) 先生とプロジェクトメンバーと劇団メンバー紹介 日本の方に紹介していただく
12:40~15:10	劇団プレゼン （パワーポイントには日本語訳がついています。）
13:10~13:20	劇団パフォーマンス（日本語通訳者：邱明吉・ 山極匠朗）
13:20~40	質疑応答(時間を延ばすことができる)
13:40~14:00	劇団メンバーの閉会挨拶 白山小学校代表、大樹高校代表からのお礼言葉を述べる。
14:00	閉場

当日は、本校の他に香川県白山小学校もオンラインでつながり、一緒に鑑賞した。本校は、各学年ごとに会場を用意し鑑賞した。今回の鑑賞会の演目「孫悟空」は、親しみのあるストーリーではあるが、日本語訳がついているとはいえ、馴染みのない中国語での展開を理解するのは少し難しかったようである。

オ　事後学習

台湾の文化に触れた経験、その場を用意して下さった台湾の劇団の方々へお礼のメッセージを贈ることにした。Ａ６サイズの用紙にそれぞれ感じたことやお礼の言葉を書いてもらい、それを 2 冊の冊子に仕上げた。冊子に仕上げる作業には、3 年生の有志が 6 名ほど携わってくれた。完成後、台湾に向けて郵送した。



成果及び評価

台湾見学旅行が叶わなかった 3 学年、2 学年に対しては、とても貴重な体験となった。事前学習のために送られてきた「影絵人形の作り方動画」は、現地の大学生が慣れない日本語で説明しており、台湾の学生と交流していることが実感できるものであった。また、当日の鑑賞会も同様で、画面から馴染みのない中国語が聞こえてくると、生徒の期待も高まっていたようだ。さらに、鑑賞後にメッセージを書くことにより、双方向のやり取りが実現した。

こうして、短い時間の鑑賞会ではあったが、事前・事後学習を充実させて、当初の目的がしっかり果たせた取り組みとなった。また、1 学年にとっては、来年度実施の見学旅行が台湾に行けることになったときには、その事前学習としての位置づけにもなった。

今後の課題

今回の影絵人形劇鑑賞会の開催については、台湾の文部省の経費で実現している国際交流事業とのことなので、同様の形での交流会が今後も継続できるかは未定である。今後は、違った内容でも継続した交流ができるよう、新年度計画を進める。

東華皮影戯 腳本 （日文版）

悟空； 天と等しい大聖者である孫悟空と呼ばれる俺は、師匠と弟子と共に経本を取りに行くべく西側にある天竺（てんじく）の国に向かうのだった。

しかし、この火の山を抜けると、そこ一面には火が広がっていて、今にも焼け焦げてしまいそうだ！！！

だから、俺たちはここを通ることができない！！

その土地の神である福徳正神（ふくとくしょうがみ）によると、この火は、俺が５００年前に天宮で大暴れしたときに招いてしまったらしい、、、

もし、ここ一面に広がる炎を消したければ、必ず芭蕉洞（ばせんどう）に行って鐵扇公主（てっせんこうしゅ）と呼ばれる姫様からバショウというもので作られた芭蕉扇（バショウおうぎ）とよばれるうちわを借りに行かないといけないと、、、、

ん～でもその人は俺の義理の兄弟である牛魔王の奥さんだから、その義理のお姉さんに直接＜芭蕉扇（バショウおうぎ）を貸してくれ～＞って言えば多分貸してくれると思うから大丈夫！！じゃあー、さきをいそごう！！！

妖精; 大変だ！！！！今門の外にサルが一匹来ていて、急用があるから早く奥様に知らせろと言ってる!!!

第二幕

小妖：奥様～！！！奥様に尋ね人が来ています！！！

鐵扇：おやおや、小悪魔よ、そんなに慌ててどうしたのですか？

小妖：奥様との面会を求めてるんですよ！！私たちの洞窟の門に、その、、、サルが一匹来たんですよ！！

彼は(天と等しい大聖者、孫悟空)と名乗っていて、奥様に急ぎの用があると言っているんです！！！

鐵扇：な、なんですって？

あの暴れん坊ザルが来たと言うのですか！！

いいでしょう、穏やかな道を歩けばいいものを、あのサル自ら愚かな選択をするとは、、、

よし、敵がやってきました、、早くほかの小悪魔たちに知らせておくれ！

小妖：はい！！承知しました！！

鐵扇：では私と共に復讐しに向かいましょう！！！
第三幕
悟空：あれ？おかしいなぁ、、あの小悪魔が洞窟に入って行ってからどれくらい経った？なんでまだ便りの一つもないんだ？
悟空：ん？お、お姉さん？何でですか？やめてください！！
鐵扇：この暴れん坊ザルめ！！どの面下げて私に会いに来たんだ！！
悟空：お、お姉さん、僕があなたに何をしたっていうのですか！？！？
鐵扇：よく聞け！そこの暴れん坊ざる！私はいまだにお前が観音様に我が息子を南海に連れていくよう頼んだことを憎んでいる。今日中に我が息子を必ず返してもらう。もしできないというならばお前を帰すわけにはいかない。
悟空：お姉さん！！あなたの息子が南海に修行に行けたことを感謝してほしいくらいですよ！！それに今日は芭蕉扇（ばしょう扇）を借りるために来たんです！お願いですからその扇を一回だけ俺たちに使わせてください！！！
鐵扇：何を馬鹿げたことを言ってるんだ！！我が息子を返せ！！！！
（大戦中）擬音を言う
第四幕
鐵扇：あの憎たらしいサルめ！悔しいが、あやつのカンフーが凄すぎて私じゃ相手になれやしない。こうなったら洞窟からあの扇をとってきて、あやつをはるか遠くまで吹き飛ばしてしまえ！！！はっはっは～！！
第五幕
悟空：もしやお姉さん？僕にその扇を貸してくれるんですか？
鐵扇：愚かな孫悟空よ、この扇の凄さをしかと見るがよい！！！！
えぃーーーー！！！！
悟空：ああぁぁぁぁぁぁ！！！！、、、、、、
鐵扇：はっはっはぁーーーーーー！！！孫悟空よ、おまえはもう私の扇によって宇宙の果てまで吹き飛ばされてしまっただろう！今後またお前を見かけたら私の寿命が半分なくなるだろうなはっはっはぁーー！！！
劇 終
(張博國演師出場：義理の姉である鐵扇公主（てっせんこうしゅ）の扇によって
宇宙の果てまで飛ばされた孫悟空は果たして生きて戻ってくるのでしょうか？孫悟空の弟子たちは最終的にあの一面に広がる火の山を通り抜けることはできるのでしょうか？
機会があれば皆さんまたお会いしましょう！ありがとうございました！

（４）地域探究活動

目的

地域社会をテーマに、課題設定、仮説検証、まとめという探究のサイクルを体験することで、実社会の諸問題に対する課題解決能力を育成する。また、社会参加意識の育成と郷土愛の醸成も目指す。

対象生徒

３学年 32 名

活動の概要

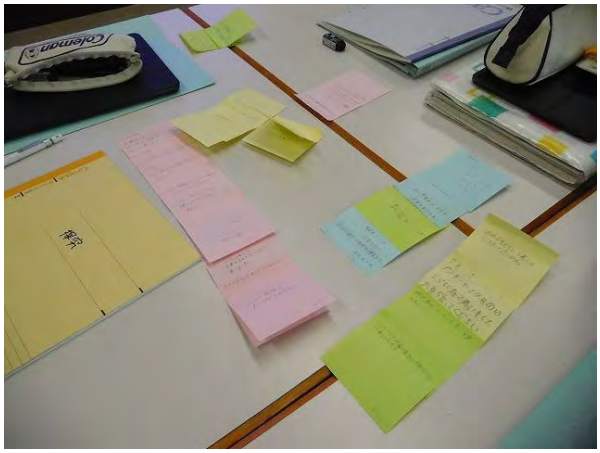
４月～７月に総合的な探究の時間を 30 時間分配当し実施した。

ア　令和４年４月　イントロダクション・課題設定（５時間分）

探究活動の意義・目標・進め方を確認し、地域や世の中についての関心事と個人の関心事を深掘りするところから活動をスタートした。次に、「食」「宇宙」「観光」「コミュニティ」の各分野で活躍されている大樹町内の方にお越しいただき、生徒がそれぞれ興味があるな分野のお話を聞かせていただき内容を全体で共有した。この時点で、自分の仮テーマを決定し、内容が近い仮テーマの生徒でグループを作成した。

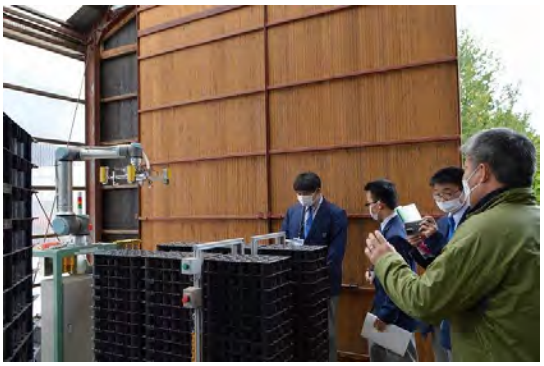
イ　令和４年５月　仮説設定・情報収集（８時間分）

グループごとに何を課題として設定するか検討し、課題に対する仮説を設定した。設定した課題と仮説を中間発表という形で１度全体で共有し、互いのコメントも参考にしながらブラッシュアップを行い、仮説を検証するために必要な活動を考えフィールドワークの計画を作成した。



ウ　令和４年６月９日（木）　フィールドワーク（６時間分）

大樹町役場や企業への訪問、河川敷の野外調査、大樹町福祉協議会の方との打合せ、都市部から大樹町へ移住してきた方を招いての座談会、和牛の食べ比べなど、各グループで計画した活動を行った。活動前後の空き時間を利用して、ここまでの活動をまとめて発表資料を作成する準備を行った。また、別日に追加でフィールドワークを行ったり、町内の福祉イベントの企画・手伝いに参加したグループもあった。



エ　令和４年６月～７月　まとめ・発表準備（５時間分）

これまでの探究ノートやワークシートを元に、１グループ７分を目安にパワーポイントを用いて発表資料を作成し、発表に向けた練習も行った。また、当日の司会進行等の役割分担も確認した。

オ　令和４年７月 22 日（金）　成果発表会・振り返り（６時間分）

大樹町長、大樹町教育委員、大樹町議会議員、大樹小・中学校長、大樹町学校運営協議会委員、３学年保護者に案内文を送付し、本校体育館で成果発表会を実施した。また、２学年生徒も参加した。３学年生徒はステージ上で発表後、質疑応答を行い参加者と意見交換を行った。

成果発表会終了後、昼休みを挟んで活動全体の振り返りを行った。生徒が１人ずつ今回の活動で感じたことをノートにまとめ、全体に向けて発表した。

成果及び評価

課題設定、検証、まとめ、発表に生徒が主体的に取り組むことができた。毎回の活動後に提出された探究ノートのコメントや授業評価アンケートから、「今回の活動が進路活動や今後の人生において役に立つ」という評価を多数得られた。

成果発表会にお越しいただいた地域の方からは「今の高校生がどんなことを考えているかがわかった」「様々な視点で地域の魅力や課題を示していて勉強になった」などのコメントをいただいた。本校２学年生徒も自分たちで課題を設定し堂々と発表している３学年生徒を見て刺激を受けていた。

今後の課題

地域コーディネーターが企画・進行・渉外、校内担当者が校内調整・準備・進行補助という役割分担で実施したが、地域コーディネーターや担当教員が変わった際に同じような活動ができるか疑問が残る。スケジュールや使用したワークシートをデータとして残し次年度以降に引き継ぐとともに、担当教員以外も毎時間ではなくても活動に関わることが必要だと考える。

生徒の活動をより良いものにするためには外部と関わる活動を増やすことが必要である。今年度は６時間分のフィールドワークを１回行ったが、４時間程度のフィールドワークを２回設定し活動の途中で仮説をブラッシュアップできるようにする予定である。

この活動を生徒・地域の双方にとって有意義な形で続けるためには、年度をまたいだ継続性が重要である。毎年、０から課題を設定するのではなく、前年度の活動をある程度踏まえた状態で活動を開始できるとよい。そのために、２学年の総合的な探究の時間を１単位増やして２・３学年合同で活動するなど、３学年の生徒が活動の内容と進め方を２学年の生徒に引き継ぎながら進められる仕組みをつくることも検討の余地がある。

R4 年度　3 年『総合的な探究の時間』

授業計画書

●カリキュラムと各授業の目的

時数	内容	ワーク
1 2	イントロダクション 個人テーマ探索	・探究活動の目標設定 ・Wants 探索シート
3	インプット用の仮チーム作成 仮プロジェクトテーマ設定	・プロジェクトアイディアシート
4 5	地域講話（4 テーマ） 地域講話まとめ・共有	・インタビュー計画シート
6 7	個人テーマ再設定 チーム分け、チームブレスト	・プロジェクトアイディアシート（個人） ・プロジェクトテーマシート（チーム）
8 9	現状確認、調査 仮説設定、検証計画づくり	・現状確認シート ・仮説検証計画シート
10 11	中間発表 仮説・検証計画ブラッシュアップ	・仮説検証計画シート
12 13	検証ブラッシュアップ・準備 ※調整含む	・仮説検証計画シート
14 15 16 17 18 19	フィールドワーク（検証） 検証結果振り返り	・仮説検証振り返りシート

時数	内容	ワーク
20	発表についての説明 発表まとめ	
21		
22	発表内容まとめ	
23		
24	発表準備・リハーサル	
25	地域向け発表	
26		
27		
28		
29	探究活動振り返り	・振り返りシート
30		

1. イントロダクション・個人テーマ探索

時数	2 コマ	場所	視聴覚室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- 探究活動の目的、意味をしっかりと理解し、自分自身の活動としてスタートする心構えができる
- 自分の興味関心・地域や社会への興味関心のタネから探究テーマを絞り込む

＜期待する生徒の変化＞

- 探究活動を終えた後の自分の変化を楽しみに感じる
- クラスメートと地域の人と協力して積極的に取り組みたいと感じる

＜スケジュール＞

00:00　はじまりの言葉（別段 T）
00:03　コーディネーター自己紹介（神宮司）
00:05　イントロダクション（神宮司）
00:35　【ワーク】探究活動の目標設定
00:45　3～4 人で共有
00:50　休憩
01:00　Wants 探索シートの説明（神宮司）
01:10　【ワーク】Wants 探索シート記入
01:30　振り返りのやり方について説明（神宮司）
01:40　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
01:50　終了

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン
- 【ワーク】探究活動の目標設定シート　人数分印刷
- 【ワーク】Wants 探索シート　人数分印刷
- インタビューゲストリスト　人数分印刷
- 探究活動ファイル
- 振り返り記入ノート
- iPad（基本的に全ての時間に持ってくる）

＜回収するもの＞

- 振り返りノート
- Wants 探索シート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信
- 次回インタビュー活動に向けたチーム分け（3～4 人）

2. インプットのための仮チーム作成とインプット計画

時数	1 コマ	場所	視聴覚室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- 自分の興味関心がある事柄について、地域の専門家から話を聞き、探究テーマについてより強い関心につなげる
- そのために相手への想像力をもち、インタビューを有意義な時間にするための準備と計画づくりを体験する

＜期待する生徒の変化＞

- 主体的にインタビューしようとする気持ちが生まれる

＜スケジュール＞

00:00　あいさつ、ノートと Wants 探索シート返却
00:03　チーム分けとインタビューについての説明（神宮司）
00:13　【ワーク】インタビュー計画シート（チームで話し合い、個人で 1 枚書く）
00:40　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
00:50　終了

＜用意するもの＞

- チーム分けを書いた紙　人数分印刷
- 【ワーク】インタビュー計画シート

＜回収するもの＞

- 振り返りノート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信

インタビューのタイムキーパー役を決めて伝えておく（先生＋神宮司で 4 名）

＜その他＞

チームで話し合ったが、どうしてもこの人の話が聞きたいなどがあれば、グループ移動は可能にする。

3. 地域講和

時数	2 コマ	場所	4 教室に分かれる	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- 自分の興味関心がある事柄について、地域の専門家から話を聞き、探究テーマについてより強い関心につなげる

＜期待する生徒の変化＞

- 話を聞き、さらに興味関心があることについて疑問に思ったことを質問できる
- もっと知りたい、体験してみたい、調べてみたいという気持ちが生まれる

＜スケジュール＞

※スタートは全員視聴覚室で

00:00　あいさつ、ゲストの紹介（神宮司）
00:05　各教室に移動
00:10　グループに分かれて講和開始
00:50　休憩、教室に移動
01:00　印象に残ったことをチームでまとめる
01:20　発表（1 チーム 2 分×8 チーム）
01:36　ゲストから一言ずつもらう
01:41　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
01:50　終了

＜用意するもの＞

- ゲスト用の名札
- 生徒用の名札

＜回収するもの＞

- 振り返りノート

＜事後活動＞

振り返りノートの確認と返信

＜その他＞

インタビューのメモは振り返りノートに書いてもらう
タイムキーパーとして、各グループ 1 人先生（＋神宮司）についてもらう

4. 個人テーマ再設定・チーム別プロジェクト活動

時数	2 コマ	場所	視聴覚室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- 深堀りした自分の興味関心・地域や社会への興味関心のタネから探究テーマを決定する
- テーマが近い人とチームを組み、チームで取り組む探究テーマを決定する

＜期待する生徒の変化＞

- 個人テーマについてチームメンバーと一緒に探究に前向きに取り組む気持ちになっている
- これからの探究活動を楽しみ、主体的に活動したいと感じる

＜スケジュール＞

00:00　本日の進め方について説明（神宮司）　※1
00:05　【ワーク】プロジェクトアイディアシート
00:20　プロジェクトテーマ発表（一人 30 秒×40 人）
00:40　チーム分け、テーブル移動　※できれば 3 人、最大 4 人まで
00:50　休憩
01:00　チームのプロジェクトテーマ設定のやり方の説明（神宮司）　※2
01:10　【ワーク】プロジェクトテーマシート
01:40　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
01:50　終了

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン
- 【ワーク】プロジェクトアイディアシート　人数分印刷
- 【ワーク】プロジェクトテーマシート　人数分＋チーム数分印刷

＜回収するもの＞

- 振り返りノート
- プロジェクトアイディアシート
- プロジェクトテーマシート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信

＜その他＞

他人のテーマを聞いておもしろそうだなと思ったら、個人で書いたテーマと違ってもOK。グループに入れない子は先生方でフォロー、グループを決める。
※1：チームで探究活動をする意味について説明に含める
※2：スムーズなチームブレストのやり方についてレクチャーする

5. プロジェクト活動：現状確認・仮説設定

時数	2 コマ	場所	視聴覚室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- チームで取り組む探究テーマについて、自分たちは何を知っていて何を知らないのかを洗い出し、必要な調査を考える
- 現時点で知っていることで仮説をたて、フィールドワークに向けた仮説検証の土台づくりをする

＜期待する生徒の変化＞

- 答えのない問いへの向き合い方を体感し、わからないことに対する次のアクションを考えることができる

＜スケジュール＞

00:00　本日の進め方について説明（神宮司）　※1
00:20　【ワーク】現状確認シート
00:50　休憩
01:00　仮説の立て方についてレクチャー（神宮司）　※2
01:10　【ワーク】仮説検証計画シート
01:40　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
01:50　終了

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン
- 【ワーク】現状確認シート　チーム分印刷
- 【ワーク】仮説検証計画シート　チーム分印刷

＜回収するもの＞

- 振り返りノート
- 現状確認シート
- 仮説検証計画シート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信
- フィールドワーク先について目星をつけはじめる

＜その他＞

※1：少し時間を長めにとり、これから取り組む内容について丁寧に説明する
※2：効果的な仮説の立て方についてミニ講義

6. 中間発表・ブラッシュアップ

時数	2 コマ	場所	視聴覚室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- チームで取り組む探究テーマについて発表し、他者から質問や意見をもらうことで仮説と検証内容をブラッシュアップする

＜期待する生徒の変化＞

- 自分にはない視点をもらうことで、視野や検証方法に広がりが生まれることを体感する

＜スケジュール＞

00:00　本日の進め方について説明（神宮司）
00:05　発表準備
00:10　プロジェクトテーマ発表（1 チーム発表 1 分＋フィードバック 7 分×5 チーム）
00:50　休憩
01:00　プロジェクトテーマ発表（1 チーム発表 1 分＋フィードバック 7 分×3 チーム）
01:25　【ワーク】仮説検証計画シート（ブラッシュアップ）
01:40　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
01:50　終了

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン

＜回収するもの＞

- 振り返りノート
- 仮説検証計画シート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信
- フィールドワークの交通手段や関係者への調整

＜その他＞

7. 仮説検証のブラッシュアップ、フィールドワーク事前準備

時数	2 コマ	場所	視聴覚室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- チームで取り組む探究テーマについて、たてた仮説検証計画をブラッシュアップする
- フィールドワークで検証する内容について、関係者との調整やスケジュールなどを決める

＜期待する生徒の変化＞

- フィールドワークでの学びを自分たちでデザインし、必要な準備を考え取り組むことができる

＜スケジュール＞

00:00　本日の進め方について説明（神宮司）
00:05　【ワーク】仮説検証計画シート（ブラッシュアップ）
　　途中、休憩をはさむ
01:40　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
01:50　終了

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン

＜回収するもの＞

- 振り返りノート
- 仮説検証計画シート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信
- フィールドワークの交通手段や関係者への調整

＜その他＞

授業の中で生徒に先方にお願いする文書をつくってもらう。（後日神宮司が先方に送付）

8. フィールドワーク

時数	6 コマ	場所	視聴覚室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- チームで取り組む探究テーマについて、たてた仮説検証計画を実際に検証する

＜期待する生徒の変化＞

- たてた仮説と実際に聞いてみる・やってみることによって、気づきが得られることを体験する

＜スケジュール＞

00:00 あいさつ、フィールドワーク後の流れ（振り返りの目的）を説明
00:10 フィールドワーク活動
※チームごとにたてたスケジュールで実施。終わり次第、検証結果の振り返りを開始。
【ワーク】仮説検証振り返りシート
【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン
- 【ワーク】仮説検証振り返りシート

＜回収するもの＞

- 振り返りノート
- 仮説検証振り返りシート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信

＜その他＞

フィールドワーク出発前に戻ってきた後の流れ、振り返りの意味と目的を説明する

9. 発表まとめ①

時数	2 コマ	場所	パソコン室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- 実際に検証して得られた事実を整理し、自分たちの考えがどう変化したかを整理する

＜期待する生徒の変化＞

- 体験を通して得た気づきを振り返りによって言語化することで、自分の気づきが確かなものになることを体感する

＜スケジュール＞

00:00　発表についての説明（神宮司）　※１
00:10　発表まとめ活動
　　途中、休憩をはさむ
01:40　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
01:50　終了

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン
- スライドの型（パワーポイント）

＜回収するもの＞

- 振り返りノート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信

＜その他＞

※１：発表の目的、含めてほしい内容について説明する

10. 発表まとめ②

時数	2 コマ	場所	パソコン室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- 実際に検証して得られた事実を整理し、自分たちの考えがどう変化したかを整理する

＜期待する生徒の変化＞

- 体験を通して得た気づきを振り返りによって言語化することで、自分の気づきが確かなものになることを体感する

＜スケジュール＞

00:00　発表まとめ活動
　　（1 チームずつ、現時点の発表内容を先生に共有しアドバイスをもらう）
　　途中、休憩をはさむ
01:40　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
01:50　終了

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン

＜回収するもの＞

- 振り返りノート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信

＜その他＞

11. 発表準備・リハーサル

時数	1 コマ	場所	パソコン室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- 地域向け発表に向けて発表の流れを確認する

＜期待する生徒の変化＞

- 地域向け発表について自信をもって話せる気持ちの準備ができる

＜スケジュール＞

生徒同士でグループごとペアになって発表練習、フィードバック

12. 地域向け発表

時数	4 コマ	場所	体育館	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- 探究活動の成果を公に発表することで、自身と地域社会とのつながりを認識する

＜期待する生徒の変化＞

- 探究活動を経て、何を考え体験し、どう考えが変化したのかを自分の言葉で伝えることができる

＜スケジュール＞

00:00　会場準備
00:20　はじまりの挨拶
00:25　発表（1 チーム 7 分、質疑応答とフィードバック 3 分）4 チーム
01:05　休憩
01:15　発表（1 チーム 7 分、質疑応答とフィードバック 3 分）4 チーム
01:55　休憩
02:05　発表（1 チーム 7 分、質疑応答とフィードバック 3 分）4 チーム
02:45　ゲストの方を代表して講評
02:50　校長先生から講評
02:55　終了、後片付け後、教室に戻る
03:30　【ワーク】振り返り記入　※各自ノートに記入
03:50　終了

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン

＜回収するもの＞

- 振り返りノート

＜事後活動＞

- 振り返りノートの確認と返信

＜その他＞

ゲスト確認、連絡（神宮司）
校内の役割分担
生徒同士の相互評価をする（iPad でコメントアップ）
ゲストのコメント収集ツール検討、紙でも配布

13. 振り返り

時数	2 コマ	場所	教室	進行	神宮司

＜ねらい・目的＞

- 探究活動全体を通して、自分に起きた変化について振り返り、得た気づきをこれからの生活に活かすこと

＜期待する生徒の変化＞

- 体験を通して得た気づきとこれから取り組んでみたいことを言語化することで、新しいことや答えのない問いとの出会いを前向きに捉えることができる
- 高校卒業後の進路について自信をもって進むことができる

＜スケジュール＞

00:00　振り返りの説明（神宮司）
00:05　【ワーク】振り返りシート、チームメンバーに一言（付箋に書く）
00:20　振り返りの発表（一人発表 1 分、チームからコメント 1 分）（15 人）
00:50　休憩
01:00　振り返りの発表（一人発表 1 分、チームからコメント 1 分）（21 人）
01:42　おわりの言葉
01:50　終了

＜用意するもの＞

- プロジェクター、スクリーン
- 付箋

＜回収するもの＞

- 振り返りシート

＜事後活動＞

- 振り返りシートの確認と返信

＜その他＞

3　大樹高 STEAM における取組

（1）室蘭工業大学連携授業

目的

体験的な出前授業を核として教科等横断型学習を実施し、課題解決能力やデザイン思考を高めることでモノづくり人材を育成する。

対象生徒

１学年 27 名、２学年 23 名、３学年２名（数学Ⅲ・物理選択者）

活動の概要

令和４年度は室蘭工業大学の清水一道教授に合計４回来校していただき、１度に４時間分（２時間続きの授業を昼休みを挟んで２学年分）出前授業を行った。

ア　令和４年４月 27 日（水）３、４校時（３学年)、５、６校時（１学年）

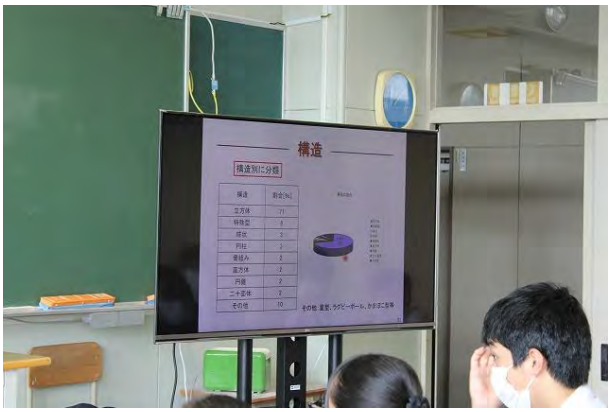
３学年には工学の最新トピックの紹介とシミュレーションを行う意義について講義を行った。１学年には清水教授の自己紹介の後、金属やモノづくりの歴史や意義、鋳造の方法、工学・数学・生物学の関連についての講義、室蘭工業大学の紹介を行った。

イ　令和４年６月 15 日（水）３、４校時（１学年)、５、６校時（２学年）

放物線を題材に、物理学と数学の関連、パラボラアンテナの特徴などについて講義を行った。演習として、与えられた数式を元にグラフ用紙に点を打ち放物線を完成させ、放物線に入射する直線が１点に集まることを作図で確認した。

ウ　令和４年９月 13 日（火）３、４校時（２学年）、５、６校時（１学年）

エッグドロップを通して設計と強度について学習した。班ごとに段ボールとガムテープだけを用いて生卵を６個格納できる容器を作成し、３階から容器ごと落下させ格納された生卵が割れずに残ること目標として実験を行った。実験後、各班の容器の質量や構造と割れずに残った生卵の数の関係を考察する予定だったが、容器を落下させたところで終了時間となった。



エ　令和４年 12 月 19 日（水）３、４校時（２学年）、５、６校時（１学年）

薄い紙に切り込みを入れ、切り込みの形と大きさにより引っ張り強度がどう変わるか実験を行った。紙の両端を鉛直縦向きに固定し、下端にバケツをぶら下げた状態でバケツの中に鉄粉を少しずつ入れ、紙がちぎれるまでに入れた鉄粉の質量で紙の強度を測定した。実験後、切り込みの大きさと鉄粉の質量の関係をグラフで表し考察する予定だったが、紙の強度を測定し終わったところで終了時間となった。

成果及び評価

最先端の実験動画やシミュレーションを紹介していただいた。「卵を割らない」「切り込みを変えて紙の強度を比べる」など、実生活に登場するモノを使用し、結果が社会でどう活かされるかイメージしやすい題材で実験を企画していただいた。

今後の課題

出前授業内の実験には意欲的に取り組むが、講義や考察に苦戦している生徒が多くみられた。元々、理系分野に興味をもっていた生徒は眼を輝かせて授業にのぞんでいたが、その他の生徒のモノづくりへの興味が増したとは言い難い。内容も高校レベルではあるが本校の生徒にとっては難しく、予定していたプログラムが全部終了しない回もあった。

高校側と大学側での事前打ち合わせが不十分であったため、高校の授業の進度と出前授業で扱う内

容が合っていないことがあった。来年度からは連携を密にし、高校側は教科の授業内で事前・事後に出前授業と関連する内容に触れること、大学側には高校生の実態を理解してもらったうえで出前授業の内容を選定してもらうことが必要である。また、大学側の移動の負担が肉体的・金銭的に大きいので、リモートでの実施も検討する。

（2）大樹エアロスペーススクール 2022

目的

大気球による宇宙科学実験をはじめ、ハイブリットロケット開発、民間企業による宇宙開発、衛星を利用した未来の農業など、様々な分野のプロフェッショナルと一緒に、次世代につなぐ地球、人、宇宙開発の未来を考える。

対象生徒

３年Ａ組　代表生徒１名

活動の概要

令和４年７月 26 日から 29 日にかけて、宇宙航空研究開発機構（以下 JAXA）と大樹町が主催する大樹エアロスペーススクール 2022 に本校３学年の生徒１名が参加した。全国の宇宙開発に興味をもつ高校生とともにモデルロケットの作成やハイブリッドロケットの研究者の講話、「衛星を利用したスマート農業」としてドローンによる解析作業や無人トラクターの試乗体験など宇宙開発に関わる最前線を体験することができた。

７月 26 日（火）

大樹航空宇宙実験場へ行き、格納庫や管制塔の見学を行った。格納庫では大気球の発射方法やこれまでの実験結果を教えていただいた。その後、JAXA 有人技術部門蜂谷友理氏による「人と宇宙開発の未来」というテーマで講演いただいた。JAXA といえばロケットの開発がイメージされるが、様々な分野の人間がいて、一つの組織が成り立っていることが伝わる内容であった。特に、人工衛星に補給物資などを積んだものを結合させるときの大変さを知ることができた。

７月 27 日（水）

インターステラテクノロジズ（以下 IST）堀尾宗平氏による「宇宙産業の可能性」というテーマで、民間企業で宇宙開発を目指している IST の取り組みなどを紹介いただいた。その後、IST の工場、発射場見学などをさせていただいた。工場では現在開発が行われている ZERO ロケットの研究を間近で感じることができ、宇宙開発の最前線を感じることができた。

午後からは北海道大学永田晴紀先生による Zoom での講演となった。永田先生はハイブリットロケットの研究者であり、ハイブリットロケットの特徴やアルテミス計画とのつながりなどを話していただいた。その後、モデルロケッ

トの打ち上げを行った。発射したロケットが発射した地点にしっかりと落下する、ロケットの中に入れていたものが衝撃などで変形せずしっかりと残っているかを基準にグループごとに競った。パラシュートをどのような形にするか、ロケットの中に入れたものにできるだけ衝撃を与えないようにするためにはどのように緩衝材などを設置するか、ロケットをただ打ち上げるだけのものではないという視点で考えることができた。

7月28日（木）

JAXA 学際科学研究系福家英之先生による「大気球実験で迫る宇宙の謎」というテーマで講義を受けた。大気球を用いて高層大気の観測や宇宙粒子線の観測による宇宙物理の研究、高高度から実験装置を降下させる実験などの宇宙工学実験が行われている。大気球はロケットに比べ打ち上げ条件が厳しくなく、またコストもはるかに小さいため実験には適しているとのことである。

その後、「衛星を利用したスマート農業」としてドローンによる解析作業や無人トラクターの試乗体験を行った。農業や酪農従事者の減少や高齢化が進行していく中で、ドローンや無人トラクターといった自動で操縦できる機器というものが解決策となる。しかし、これらも人口衛星を経由して使用されることから、宇宙というものが身近に感じられるものである。

7月29日（金）

「地球・人・宇宙開発の未来を考える」をテーマにグループディスカッションを行い、ミッション報告会として各グループがプレゼンテーションを行った。地球と人、そこに宇宙開発がどのように関わってくるのか、問題点は何か、どのような未来が待っているのかなど、現段階では夢物語にしか聞こえない内容であっても受講生たちが真剣に考え、意見を出し合い、その実現に向けて議論する姿は将来の宇宙開発を担っていく研究者のようであった。

成果及び評価

令和5年1月28日に大樹町生涯学習センターにて、大樹エアロスペーススクール2022に参加しての報告を行った。宇宙開発の最先端の話を聞くことで、進路学習にも一層意欲的になり、それ以上に受講生同士の絆がうまれ、情報交換等を通して切磋琢磨している。

（3）JAXA講座・IST工場見学（航空宇宙産業に関する学習）

目的

大樹町の産業のひとつである航空宇宙産業に対する理解を深める

対象生徒

1学年

活動の概要

①ＪＡＸＡ職員による講座受講、大樹航空宇宙実験場見学

日時　10 月 20 日（木）3.4 時間目

「地域の産業について理解を深める」ことを目標とした探究活動の一つとして、「宇宙産業」に関わる施設の見学を実施した。ＪＡＸＡ航空技術部門　藤井謙司氏による講座においては、私達の生活の中に、どのように宇宙産業が関わっているのかを丁寧にご説明いただいた。特に、飛行機の安全運行に関わる技術の研究や、気象実験の成果等の具体例を挙げていただき、充実した学びの時間となった。講座後は、実際に実験等で使用するヘリコプター等の機材を間近で見学することができた。大樹小学校・中学校出身者にとっては、知識を深める場、大樹町外から登校している生徒にとっては、新しい発見のある機会となった。

②インターステラテクノロジズ職員による講座受講、ロケット発射場見学

日時　10 月 21 日（金）3.4 時間目

インターステラテクノロジズ職員による講座においては、大樹町に建設予定である HOSPO の説明を受け、町の将来像をイメージすることができた。講座を受講して、大樹町の立地が航空実験やロケット発射に適した場所であることを知った上で、ロケット発射場へと赴いた。エンジンの実験をしている設備や発射台を間近で見学することで、より生徒の航空宇宙産業への理解が深まった。

成果及び評価

３年次の地域探究活動において、生徒たちが課題設定を自ら行う上で、さまざまな基礎的知識が必要となってくる。その一つとして、町の産業としての「航空宇宙」に触れる機会を１年次のうちから作ることは大変有意義である。今後、つながりを持って探究活動を継続することで、３年次の地域探

究活動に生かされる力が生徒に身についていって欲しい。

今後の課題

生徒の実情として「航空宇宙産業」が自分の将来や生活とはかけ離れたものとして認識してしまいがちである。「地域の産業を理解する」こと、また「職業観を深めていく活動の一環である」という活動の意義を、しっかりと伝えながら実りのある時間としていくことが必要である。見学や講座を受講する前に、事前準備として大樹町の産業について調べる、宇宙航空産業について考える時間を作るなど、生徒が自ら「知りたい」と感じられるような仕組み作りを検討していきたい。

（4）学校設定科目の開発

普通科改革支援事業　学校設定科目

「情報と宇宙」計画書

2023 年 2 月 3 日

◆本科目の目的

1　ＩＣＴ活用の基盤となる情報処理に関する基本的な知識・技能を実践的な活動を通して習得する。

2　ＩＣＴを活用した協働作業や、コミュニケーションツールとしてのＩＣＴの活用に必要な技能を実践的な活動をとおして習得する。

3　文字・音楽・効果音・静止画・動画など、情報を表現する際の多様な技術や技法を実践的な活動を通して習得する。

4　地域が推進する航空宇宙産業と連携し、外部講師等を活用して、宇宙やロケットに関する科学技術の知識及び未来社会に与える影響等を学ぶ。

5　地域の人材を活用し、地域創成や社会的課題における、航空宇宙産業やその関連産業が果たす役割や波及効果について学ぶ。

6　「宇宙開発に関連する科学技術や情報を活かした地域の課題解決」を活動のテーマとし、探究学習の手法を取り入れながら、宇宙科学がもたらす情報と実生活との関わりについて考察する。

7　実践的な活動の手法として、大樹町航空宇宙推進室、ＪＡＸＡ、地域航空宇宙関連企業インターステラテクノロジズ、和歌山大学、室蘭工業大学等と連携し、出前授業や工場・射場の見学等により生徒の興味・関心を喚起し、主体性を育成する。

◆身につけたい力

・日常生活において欠かせない存在となった「情報」について、「情報」がもたらされる仕組みを学び、「情報」を正しく読み解き、さらに必要な情報を選び取るまたは取得する力を育む。

・「情報」を活用して自身の課題や地域社会の課題を解決する力を育む。

◆その他特記事項

1　大樹町が取り組む「宇宙のまちづくり」は、人工衛星を活用した情報社会の発展に寄与する取り組みであり、その特性を活かした実践的な体験の場を活用する。

2　自然科学の分野と社会科学の分野が関連する教科横断的な内容となるよう工夫する。

3　地域住民に「高校教育と町づくり」についての理解が深まるよう、地域人材を活用するなど、生徒が地域と連携した航空宇宙産業を核とした地域創成を学ぶ様子を情報発信する。

◆「情報と宇宙」カリキュラムの流れ

情報基礎知識の習得

情報を収集・処理・表現する知識と技術を習得させ、情報の意義や役割について理解させるとともに、諸活動において情報を主体的に活用する能力を身につける。

↓

大樹町の航空宇宙の取り組みを活かした実践的な体験

・大樹町の実験施設を活用したモデルロケット制作、ミニ人工衛星の制作体験を通じて、宇宙を活用して「情報」が得られる仕組みを体験的に学ぶ。

協力者：大樹町航空宇宙推進室・HOSPO・和歌山大学

↓

最先端の「情報」の活用事例を学ぶ

「情報」が日常社会でどのように活用されているかについて、特に地域の産業を活かした実践例を学び、「情報」の活用について考える。

協力者：大樹町航空宇宙推進室・ICTを活用している地域の産業団体や企業

↓

「情報」とともにある自身の生活や地域社会の理想について考える

「情報」を自身が描く理想や地域社会の課題解決にどう役立てていけることができるのかについて考え、自身の考えをまとめ発表する。

＜検討中事項＞

◆時間配分の割り振り等、詳細なカリキュラム

◆校内外の推進体制

◆評価方法

Ⅲ　先行事例調査研究

愛媛県立三崎高等学校　先行事例調査研究報告

別段　健太　・　大寺　　悠

（１）視察の目的

本校と同じく郡部にあり小規模な学校で、地域と連携した取り組みを行っている三崎高校の見学を通して、地域連携や探究活動の進め方、魅力ある学校づくりや地域内外へのアピールについて情報交換を行い、視野を広げる機会とする。

（２）視察の日程

11 月 29 日（火）

９：30～12：30　三崎高等学校概要説明及び三崎高等学校教員との意見交換

12：30～13：00　三崎高等学校校舎見学

13：00～13：30　三崎高等学校寄宿舎（速水寮・未咲輝寮）見学

（３）視察の内容

ア　三崎高等学校概要説明及び三崎高等学校教員との意見交換

愛媛県の最西端に位置する三崎高校は各学年２クラスの学校である。全校生徒は約 140 名で、町内出身生徒が約 40 名、県外出身生徒（令和元年度より募集開始）が約 30 名である。また、４つの寄宿舎があり約 80 名の生徒が利用している。

生徒募集では「地元の子が来たくなるような高校（空気感)」「教職員の明るさ・前向きさ」「わかりやすさ・キャッチ―さ」を大切にしており、「みさこう　さいこう　さぁいこう」という合言葉を生徒・教職員で共通認識としている。町からの補助や説明会でのプレゼンテーションだけでは不十分で、高校生や保護者の口コミ、マスコミや報道をうまく活用し勢いを出すことが大切だと考えている。

地域探究活動では総合的な探究の時間を活用して課題解決型学習「せんたんプロジェクト」に取り組んでいる。全校生徒をＰＲ、アート、カフェ、ツアー、商品開発、防災の６つのテーマに分けて、それぞれの班で年間活動計画を立て、担当教員とともに動画作成や週末のカフェを借りて運営するなどの活動を行っている。このように、小さいものからでよいので活動成果を形として残すことが生徒の達成感にもつながり、外部への大きなアピール材料になると考えている。また、この活動がコミュニケーション能力やパソコン操作技能の育成につながっているのは、生徒が必要性を感じる場面で楽しみながら活動しているからである。課題としては、班単位で地域とつながり様々な活動を実施するので、先が見通しにくく、系統だったカリキュラムとはいいにくい点が挙げられ、地域連携を総括する教員や管理職と連携しながら組織的な活動を目指している。

学校生活は生徒を主体とし、生徒も教員も一緒に楽しむ雰囲気を大切にしている。定期的に実施される「みさこうＤＡＹ」では生徒・教員共に私服の着用を認め、１日チャイムを鳴らさずに過ごすことで、生徒に自由の意義を考えさせている。

進学実績や就職内定率も高い水準を保っている。中でも月謝 3,000 円の公営塾「未咲輝塾」は全校生徒約 140 名中、100 名程度の生徒が参加している。現在６名いる講師は、伊方町がリクルーティング企業と連携して公募し、教育長などが面接の上、地域おこし協力隊として勤務

している。平日の勤務時間は 13：00～21:00 で、放課後に希望する生徒を個別指導するというシステムとなっている。複数名を対象に授業をすることはない。授業を行い終了したら退勤する講師のような働き方ではないので、教員との連携も取りやすく、学校の方針を伝えることや生徒の様子を細かく共有することもできる。この学校と公営塾の良い関係性が成功の鍵だと考えている。学校ＰＲにおいても、特別な活動だけでなく楽しい日常生活や進路に対する手厚いサポートもしっかりとアピールしている。

イ　三崎高等学校校舎見学

校庭の果実を利用して作成したマーマレードやブイにペイントを施したアートなど、生徒の活動の成果物が廊下や生徒玄関前のスペースに多数展示されていた。また、生徒が参加した活動の写真や発表資料、報道記事なども階段や廊下の壁に貼り出されていた。

未咲輝塾は生徒教室や職員室とは別の棟で実施されるため、教職員が全員退勤し校舎の機械警備を設定した後も生徒と塾職員が残り、使用した教室のみを塾職員が施錠して退勤することが可能である。

ウ　三崎高等学校寄宿舎（速水寮・未咲輝寮）見学

４つの寄宿舎のうち、２つが学校に隣接する寮（速水寮・未咲輝寮）でその他に町営住宅と現在は営業していない旅館を寄宿舎として活用している。三崎高校は県内出身生徒でも自宅からの通学が困難な生徒が多いため、県外生徒募集開始以前から速水寮が存在していた。県外生徒募集開始後、自宅からの通学が困難な入学者が大幅に増加したため、伊方町の費用で未咲輝寮を新築し、残り２ヶ所の寄宿舎の活用も開始した。

速水寮、未咲輝寮ともに１階が共有スペース（食堂・学習室等）で、２階が男子生徒の生活スペース（２人部屋・トイレ・風呂等)、３階が女子生徒の生活スペースである。食事は町内の飲食店経営者が提供している。舎監は教員が交代で担当している。

エ　参加教員所感

三崎地区は大樹町よりも田舎で、全国的に目を引くような資源がないように感じた。それにもかかわらず、地元の自然や高校生のアイデアを用いて地域探究活動を魅力的なコンテンツに仕上げているのは素晴らしいと感じた。本校での取り組みもコンテンツ頼りではなく、生徒がどう育ってほしいかを考えるところからはじめ、どの教員が関わっても生徒が最終的に自走できるような仕組み作りが必要に思えた。

また、三崎地区には高校生が働けるような場所は少なく、三崎高校の生徒はほとんどアルバイトをしておらず、放課後は部活動（加入率は高い）か公営塾で過ごすことが多いようだ。このことが進学実績や授業時間外の探究活動の充実につながっていると考えられる。

最後に、三崎高校の雰囲気は２間口で教員数が多かった頃の大樹高校にとても似ていた。対応していただいた２名の教諭は立ち上げ時は大変苦労したとも言っていたが、生徒や学校がよい方向に変わっていったことを熱い想いとともに紹介していただいた。また、管理職も含めた教員が「失敗してもいいからまずやってみよう」「できない理由を探さない」という意識で教員・生徒の声を形にしているようだ。本校でも、教員一人ひとりが研究指定事業を通して大樹高校をどうしたいかを考え、学校全体の熱量を高めることで研究指定事業が動き出すのではないか。

34
特別賞
愛媛県立三崎高等学校
「せんたんプロジェクト」
四国最西端から最先端の活動を！
概要
成果
ディスカバー農山漁村の宝（第8回選定）

9/28-29
2/15
2/16
せんたん創場
愛媛県立三崎高等学校

PR
アート
カフェ
ツアー
商品開発
防災

北海道大空高等学校　先行事例調査研究報告

高谷　　光

（１）視察の目的

本校と同じく道内にあり１間口の学校で、地域と連携した取り組みを行っている大空高校の見学を通して、地域連携や探究活動の進め方、魅力ある学校づくりについて情報交換を行い、視野を広げる機会とする。

（２）視察の日程

1 月 31 日（火）

９：00～11：30　大空高校概要説明及び大空高校教員との意見交換

11：30～12：30　大空高校校舎及び寄宿舎見学

（３）視察の内容

ア　大空高校設立の流れ

大空高校は令和３年４月に開校し、道立の女満別高校と町立の東藻琴高校の合併で設立された総合学科の学校である。女満別高校の方が交通の便も良く、施設も多いため便利ではあるが、東藻琴高校をメインキャンパスに置かないと東藻琴の資源が使われなくなってしまうことを懸念して東藻琴をメインキャンパスとした経緯がある。

全校生徒は約１００名で、３年生の農業科は東藻琴キャンパスに、普通科は女満別キャンパスに在席している。また、２年生２９名のうち道内遠方が２名、道外が７名、１年生４０名のうち道内遠方が５名、道外が９名である。

イ　大空高校のないもの５つ

①定期考査なし

授業や活動、課題、単元テストなど日々の積み重ねを評価し、単元テストが上手くいかなかった場合は再チャレンジできる。単元テストにすると、授業の進行具合に応じてテストを作成する必要が無く、まとめてテスト作成ができる。また、テストが分散されるので生徒も対策しやすい。

②時間割なし（高３）

高校３年生では時間割の７０％以上を自分で作る。多様な選択科目を設置しており、自分の進路に合わせて科目選択をすることができる。

③細かい規則なし

校則には格好などについての詳細な事項はなく、生徒自身が考えることを主眼に置いている。式典では上着着用、倫理観から適切な振る舞いができるか、教育活動に支障をきたす頭髪加工・装飾はしていないかなどの指導はある。

④担任ガチャなし

大空高校は３年間毎年違う２人担任制を採用している。現在は試行中で総合学科の１年生と普通科の３年生で実施している。

⑤体育祭なし

体育祭を実施するかしないかは生徒が決める。実施した際は、生徒は運動が苦手な人も楽しめるモルックを種目に選ぶなど工夫していた。

ウ　大空高校にあるもの６つ

①映える校舎

三角のとんがり屋根の時計台と、どことなくヨーロッパの街並みにありそうな窓枠が可愛らしい校舎には、生徒が育てた花が植えられている。生徒たちから図書館のレイアウトを変えたいという要望があった際には、レイアウトを変えるからには説明責任があると伝え、なぜそのようなレイアウトにしたかを考えさせ、色々な方々からフィードバックを受けながらレイアウトを変えていった。

②素敵な制服

制服はデザイナーに依頼して作ってもらい､滑走路をイメージした襟元の白いラインが特徴である。ジェンダーに配慮し、全ての生徒がズボンとスカートを選ぶことができる。

③タブレット端末の貸与

生徒一人一台タブレット端末が貸与されている。また、スタディサプリを全生徒に配付し、夏休みの課題でも活用されている。生徒一人ひとりに合わせた課題を配信できている。

④エアコン・ウォシュレットがある

校内には町のお金でエアコンとウォシュレット導入されている。

⑤公設塾

大空高校の生徒を対象とした町営の塾。月額２０００円で自立学習ができ、出入りは自由である。全校生徒の約半分が利用しており、常時５～１０人が活用している。常勤職員２名、サポート２名で運営されている。常勤職員は町の職員として働いており、一人は民間の塾で教科指導経験あり、もう一人は認定ＮＰＯ法人カタリバ出身である。また、ＡＩ教材 Qubena が活用されており、タブレットで一人ひとりに合った問題が学習できる。

⑥公設寮

現在使用している公設寮は緑友寮という名称で築 40 年であるが、来年度に新しい寮が完成し、寮生全員が新しい寮に移動することになっている。新しい寮では中央に塾と食堂を設置し、左右に男女２０人ずつ住めるようになっている。内閣府から出資される予算を活用しながら新しい寮は建設された。寮は町で運営されており、寮での食事は地域の人に作ってもらっている。ハウスマスターは男女１名ずつと、塾と兼務で 1 名配置している。１人部屋は中退が多くなる傾向があるため個室は避け、なるべく多くの人と関わりを持ってもらうために２人から５人部屋にしている。現在の寮では、家賃 1 万 5 千円、食費 3 万円となっている。寮内で様々なイベントを企画し行っているが、大空高校は関与しないかたちで実施している。

エ　総合的な探究の学びについて

大空高校の総合的な探究的の時間は地域に根差した問題解決を生徒自身が考えてテーマを決めている。生徒の活動は地域の大人の刺激になり、人づくり町づくりにつながっている。今年度は、将来パティシエを目指している生徒は町のスイーツ開発、養護教諭を目指している生徒は町にある各学校の保健室を訪問して理想の保健室を探究、保育士を目指している生徒はコロナでイベントができていない子どもたちのためにイベントを企画するなど様々な探究活動を行った。

オ　生徒募集について

地域みらい留学のプラットフォームに載せて全国募集を行っている。月 1 回土曜・日曜に説明会をしており、費用は年間 80 万である。オンライン説明会では、学校・寮・塾について詳しく説明し、どういう考えの学校なのか真摯に伝えることを大切にしている。オープンキャンパスは年 2 回実施しており、夏に 1 回、本州が夏休みの日に 70 組 140 名限定で行う。それだけでは参加できない人もいるので、9 月にミニオープンキャンパスを 25 名限定で行っている。その他は個別で対応している。

カ　参加教員所感

大空高校では教職員の仕事の負担にならないよう、公設寮や公設塾は町で運営しており、教職員が宿直や見回り等をする必要性はないそうだ。教職員の負担をなるべく少なくするかたちで地域の方々が様々な支援をしていることに高校と地域の強いつながりを感じた。僻地にある学校は教職員の人数が少なく、一人ひとりの負担が大きくなりがちである。学校で行わなければいけない業務をできる限り精選し、町に協力してもらえる業務は大胆に協力してもらうことが、先生方のゆとりにつながり、よりよい教育活動につながっているのだろう。

授業に関しては、校長先生からの指示で、一斉講義は必要最低限にし、アクティブラーニング型授業を取り入れた。校長先生の「やり方は先生一人ひとりが決めていい」「失敗してもいいから挑戦してほしい」という先生方へ伝えた内容が印象的であった。管理職の前向きで明確な声掛けが教職員のやる気につながっているようだ。

校長先生のリーダーシップのもと、「飛行機人」をキーワードにどのような生徒を育てるか教職員の中でクレドのように共通認識をしっかり持ちながら、学校運営が行われている様子が学校視察の中から伺えた。例えば、先生方の認識を共有するために、テーマは先生方から持ち寄りながら月１回座談会を行っているそうだ。テーマの内容としては主体性とは何か、本校の売りは何か、対話とは何かなどである。言葉をしっかりと定義し、教職員の中で認識を合わせることの大切さを改めて感じた。本校においても教職員の中で理解のともなった共通認識も持ち、明確な指針をもとに教育活動を進めることができれば、今まで以上によりよい教育活動ができるのではないだろうか。

校　舎

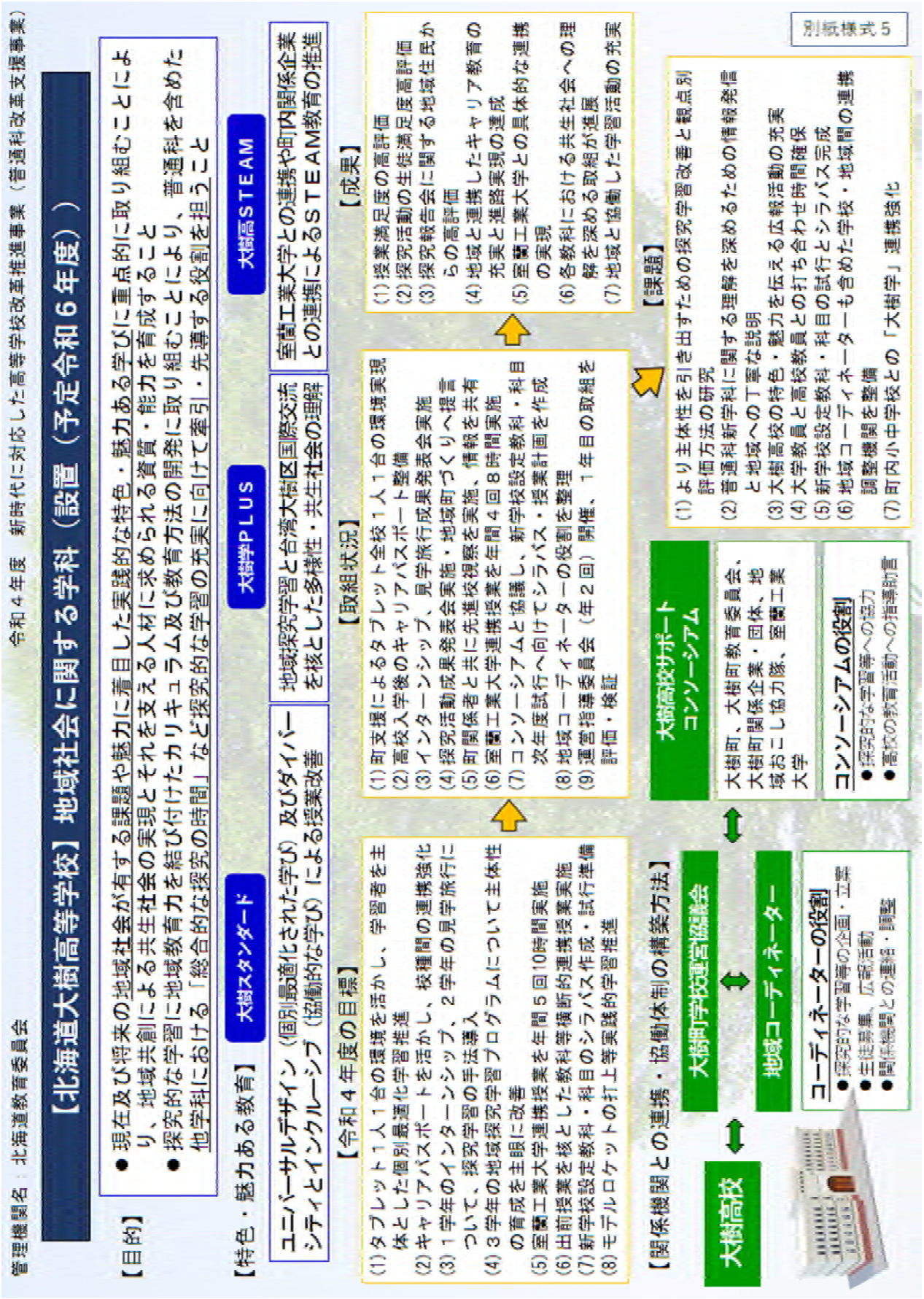
教　室

旧公設寮

新公設寮

Ⅳ　成果概要図

1　成果概要図


管理機関名：北海道教育委員会
令和４年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）
【北海道大樹高等学校】地域社会に関する学科（設置（予定令和６年度））
別紙様式５
【目的】
●現在及び将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な特色・魅力ある学びに重点的に取り組むことにより、地域共創による共生社会の実現とそれを支える人材に求められる資質・能力を育成すること
●探究的な学習に地域教育力を結び付けたカリキュラム及び教育方法の開発に取り組むことにより、普通科を含めた他学科における「総合的な探究の時間」など探究的な学習の充実に向けて牽引・先導する役割を担うこと
【特色・魅力ある教育】
大樹スタンダード
ユニバーサルデザイン（個別最適化された学び）及びダイバーシティとインクルーシブ（協働的な学び）による授業改善
大樹学ＰＬＵＳ
地域探究学習と台湾大樹区国際交流を核とした多様性・共生社会の理解
大樹高ＳＴＥＡＭ
室蘭工業大学との連携や町内関係企業との連携によるＳＴＥＡＭ教育の推進
【令和４年度の目標】
(1)タブレット１人１台の環境を活かし、学習者を主体とした個別最適化学習推進
(2)キャリアパスポートを活かし、校種間の連携強化
(3)１学年のインターンシップ、２学年の見学旅行について、探究学習の手法導入
(4)３学年の地域探究学習プログラムについて主体性の育成を主眼に改善
(5)室蘭工業大学連携授業を年間５回10時間実施
(6)出前授業を核とした教科等横断的連携授業実施
(7)新学校設定教科・科目のシラバス作成・試行準備
(8)モデルロケットの打上等実践的学習推進
【取組状況】
(1)町支援によるタブレット全校１人１台の環境実現
(2)高校入学後のキャリアパスポート整備
(3)インターンシップ、見学旅行成果発表会実施
(4)探究活動成果発表会実施・地域町づくりへ提言
(5)町関係者と共に先進校視察を実施、情報を共有
(6)室蘭工業大学連携授業を年間４回８時間実施
(7)コンソーシアムと協議し、新学校設定教科・科目次年度試行へ向けてシラバス・授業計画を作成
(8)地域コーディネーターの役割を整理
(9)運営指導委員会（年２回）開催、１年目の取組を評価・検証
【成果】
(1)授業満足度の高評価
(2)探究活動の生徒満足度高評価
(3)探究報告会に関する地域住民からの高評価
(4)地域と連携したキャリア教育の充実と連携実現の達成
(5)室蘭工業大学との具体的な連携の実現
(6)各教科における共生社会への理解を深める取組が進展
(7)地域と協働した学習活動の充実
【課題】
(1)より主体性を引き出すための探究学習改善と観点別評価方法の研究
(2)普通科新学科に関する理解を深めるための情報発信と地域への丁寧な説明
(3)大樹高校の特色・魅力を伝える広報活動の充実
(4)大学教員と高校教員との打ち合わせ時間確保
(5)新学校設定教科・科目の試行とシラバス完成
(6)地域コーディネーターも含めた学校・地域間の連携調整機関を整備
(7)町内小中学校との「大樹学」連携強化
【関係機関との連携・協働体制の構築方法】
大樹高校
大樹町学校運営協議会
地域コーディネーター
大樹高校サポートコンソーシアム
大樹町、大樹町教育委員会、大樹町関係企業・団体、地域おこし協力隊、室蘭工業大学
コンソーシアムの役割
●探究的な学習等への協力
●高校の教育活動への指導助言
コーディネーターの役割
●探究的な学習等の企画・立案
●生徒募集、広報活動
●関係機関との連絡・調整